



Vol.128
2013年08月15日 発行

発行人 岡本和久
I-O ウェルス・アドバイザーズ株式会社【ホームページ】
〒150-0012 東京都渋谷区広尾1-8-6広尾186ビル7階
TEL: 03-5789-9821 FAX: 03-5789-9822
お問い合わせ: [メールフォーム](#)

今月の ひとこと

このインベストライフが公開される8月15日は終戦記念日です。戦後、証券取引所が再開されたのが1949年5月16日でした。その日の日経平均（当時はダウ平均と呼ばれていました）は176円でした。とても面白いことにこの日のニューヨークのダウ工業株平均も176でした。円とドルの違いはあっても、また、その過程は異なっても、現在、両者ともほぼ15000であることを考えると面白い一致ですね。夏休みを利用して、戦後の日米経済の歩みについて考えてみるのも有益なことではないかと思えます。

FACEBOOK上でクラブ・インベストライフの仲間が活発な議論をしています。FACEBOOKに登録している方、ぜひ、ご参加ください。（2013年8月13日現在で参加者数は1526名です。まずは2000人を目指しましょう）

現在のマーケットをどう見るか

対談：フランソワ・カントン VS 岡本 和久



2011年秋にお会いしたときには、2012年の夏ごろからの世界的株式上昇を予言され、見事にあてたカントンさん。いまは、コムジエスト社を引退され自由な立場で中期、長期のマーケットの見通しについて語っていただきました。

[読んでみる](#)

インベストライフ・アーカイブより「生き延びる力～戦中・戦後の体験談を聞く」

聞き書き：岡本 和久

2012年の8月号、9月号で特集した記事を合体してご紹介します。悲惨な目に合うほどに人間は強くなれるのだということを実感します。そして、いまの繁栄も多くのの方々のご苦勞の賜物だと感謝せずにはいられません。

[読んでみる](#)

中国がわかるシリーズ 1 1 「新という国家の位置づけ」

ライフネット生命株式会社 代表取締役会長兼CEO、出口 治明

西暦元年のころ、世界のGDPの約四分の一は中国でした。「新」が誕生し、漢字文化が広まり、中華思想が生まれる背景について解説をしていただいています。

[読んでみる](#)

インベストライフ応援団のブログ

あいうえお順、敬称略

[紹介一覧はこちら](#)

[伊藤宏一の「近現代日本と貯蓄」ー貯蓄は美德なのかー](#)

[伊藤 宏一](#)

[実践コーポレートガバナンス研究会・ブログ](#)

[右脳インタビュー](#)

[片岡 秀太郎](#)

[鎌田泰幸のブログ](#)

クラブ・インベストライフとは？

人生を通じての長期投資は孤独な長旅です。この長旅に耐え、大きな喜びを得るには、資産運用を行うための基礎となる知識と孤独な旅を支えあう仲間が必要で、「将来の自分はいまの自分が支える」ほかない時代、クラブ・インベストライフの活動は、豊かで幸せな人生のための投資を目指しています。

毎月、ネット上で会報誌を公開するほか、FACEBOOKやTwitter上で議論の場を提供し、各地でのセミナーを開催しています。

まったく投資の経験のない方も多数、参加しておられます。大手金融機関から完全に独立しているので、特定の商品をお勧めすることも販売することも一切ありません。

<FACEBOOK、TWITTERへの投稿の際のお願い>

1. 個別商品の販売・推奨、あるいはそれに類する投稿はご遠慮ください
2. 発言はあくまで個人としてのものとしてください
3. 企業広告はご遠慮ください

I-Oウェルス・アドバイザーズのメール・マガジン

メルマガへのご登録は下記のメールアドレス宛に、空メールを送信下さい。購読は無料です。

mag@i-owa.com

毎月15日配信 無料

Facebook

Facebook上のグループ、クラブインベストライフ
<http://www.facebook.com/groups/investlife/>

Facebookへの登録が必要で、リクエストボタンを押して入会申し込みをしてください。

Facebookへはこちらをクリック

Twitter上のグループ
クラブインベストライフ
http://twitter.com/c_investlife

Twitterへの登録が必要です

[@c_investlifeさんをフォロー](#)

門多 丈

会長 澤上篤人のレポート

澤上 篤人

真マネー原理

滝沢 伯文

一日一言ブログ

竹田 和平

セゾン投信・社長日記

中野 晴啓

SRIのすすめ 未来の測り方

速水 禎

馬淵治好の凸凹珍道中

馬淵 治好

鎌田 泰幸

世代を超える想いの滴

洪沢 健

About Money, Today

竹川 美奈子

出口治明の提言：日本の優先順位

出口 治明

CFA流「さんない」投資塾

日本CFA協会

毎週3分で、資産運用の成功へ導くメルマガ！

尾藤 峰男

森本紀行はこう見る

森本 紀行

バックナンバー

一覧

- 2013年07月16日発行 Vol.127
- 2013年06月17日発行 Vol.126
- 2013年05月15日発行 Vol.125
- 2013年04月15日発行 Vol.124
- 2013年03月15日発行 Vol.123
- 2013年02月15日発行 Vol.122
- 2013年01月15日発行 Vol.121

バックナンバー

2012年12月までに発行されたインベストライフをご購入いただけます。



購入・詳細

参考データ・コーナー

基本ポートフォリオのパフォーマンス

データ提供：イボットソン・アソシエイツ・ジャパン/投信まとなび

先月は2資産型のパフォーマンスの良さが目立ちました。

[読んでみる](#)

投信データ・ウォッチ

データ提供：イボットソン・アソシエイツ・ジャパン/投信まとなび

主要な国内・海外ETFのパフォーマンスを紹介していただきました。

[読んでみる](#)

I-OWAたより

マンスリー・セミナーより 「いま、なぜマネー教育なのか」

講演：岡本 和久、レポーター：川元 由喜子

私のこれまでの中学校や高校などでの出張授業の体験を踏まえ感じたことを紹介し、画家のムムリックさんとコラボで作った「ハッピー・マネー教室」の紙芝居をお披露目しました。

[読んでみる](#)

マンスリー・セミナーより講演：「宗教、道徳と経済行動」、対談：「アジア的感性を投資に生かす」

講演：山口 勝業、ミニ対談 山口 勝業 VS 岡本和久 レポーター：川元 由喜子、赤堀 薫里

日本人の経済行動の原点は江戸時代にあるという仮説に基づき、日本的宗教観、道徳観念がどのように経済に影響を及ぼしてきたかお話をいただきました。また、対談ではアジア的感性を生かした投資について語り合いました。

[読んでみる](#)

岡本和久のI-OWA日記

★今週の「うまい！」黒毛和牛のステーキ弁当@勝塚 ★今週の「うまい！」こうやのワントンメン ★石巻市立雄勝小学校の復興に寄付をさせていただきました ★Fanet Money Lifeに寄稿させていただきました ★7月のI-OWAマンスリー・セミナーが開催されました。★資産運用「気づきのタネ」(102) 購買力の維持に注目 ★今週の「うまい！」酸辣湯麺@ひら匠 ★資産運用「気づきのタネ」(101) 六つの富(ふ)とハッピー・マネー四分法

[詳細はこちらをご覧ください。](#)

セミナー案内

マンスリー・セミナーは、個人投資家の方が、ゆたかでおおらかな人生をおくるために必要なおカネの知識を体系的に学んでいただくためのセミナーです。証券アナリスト歴15年、資産運用歴15年の岡本和久CFA®が、資産運用の理論と実践法をわかりやすく解説します。また、毎回、ゲストをお招きし、さまざまな分野の講義もしていただきます。次回は7/21(日)、その次は8/18、共に12:30~16:30@東京都渋谷区広尾1-8-6-7F(当社オフィス)で開催です。プログラムは下記サイトをご覧ください。

[詳細はこちらをご覧ください。](#)

Page Top



対談:現在のマーケットをどう見るか

フランソワ・カントン、岡本 和久

岡本 | カントンさんとは2011年の秋にお会いしてお話を伺いました。その時のご宣託は「2012年の夏ごろから金融株中心として世界的な株式市場は値上がりするのではないか」というお話でした。ほぼその通りの展開になってきて大変、感心をしています。その対談の内容は、は以下のようなものでした。

「今後1年ぐらいいは、マーケットはあまり強くはないでしょう。しかし、その後はかなり上昇を期待できそうです。半年で5割高ぐらいのことはあるかもしれません。世界的にそうなるのではないのでしょうか。価値評価を見て、非常に割安のところからのスタートですから、動きも速いと思います。一般の個人投資家の場合、アドバイザーなどが、値上がりが始まってから勧めることになるので、高速取引をしている投資家に比べ出遅れる恐れがあります。2012年の夏ごろから今回の問題の根源である金融株が動き出すのではないかと思います。それが上昇相場の兆候となるでしょう。各国政府がユーロ全体の危機感を共有するようになり、犠牲を払ってでも全体を維持しようという動きが出始めるのではないのでしょうか」(「インベストラ이프 2012年1月号より」)

山本さんの話を聞くとカントンさんは既に日々の仕事からはリタイアされていると聞いています。普通、日々の仕事から少し距離を置くと、より客観的な判断が可能となり、予測の精度もさらに上がると思いますので、今回の話は特に楽しみにしていました(笑)。

カントン | そうだと良いのですがね(笑)。もう、引退はしましたが、引き続き日本、アジア、北米、ヨーロッパの多くの企業のトップや経済人とのコンタクトを続けています。また、コムジェストのアナリストたちとも常に話をしています。また、ポートフォリオ・マネジャーたちも私のコメントを喜んで聞いてくれます。いろいろな質問もしてくれます。それは私にとっても知的な面でもありがたいことです。意見やアイデアを交換しあうというのはとても刺激になります。

岡本 | 株式投資というのは知的な行動としては最高クラスのものだと思います。私は「脳トレ」投資と言っていますが、いつまでも若々しく頭が働くためには、最も良い薬なのではない



長期投資仲間通信「インベストライフ」

でしょうか(笑)。

カントン | 本当にそうですね。適度なストレスもありますし(笑)。

岡本 | 新聞や雑誌などを丹念に読んだり、セミナーなどに参加をしたり、自分なりの仮説を立てる。その仮説に基づいて投資行動を行う。そして、その結果を検証する。そして次の仮説を立てる。このような繰り返しは知的な刺激としては最高レベルのものではないかと思います。

カントン | そういうわけで、私は現在の立場をとっても楽しんでます。まあいつもそうなのですが、非常に多くの要因がマーケットに影響しています。私の意見をお聞きになりたいということなので、少しお話をします。今、一番大切な事は、短期的なマーケット動向と長期的なものを区別して考えるということです。少し違和感を持ってお聞きになるかもしれませんが、私は長期的には比較的悲観的です。まあ、5年、7年、10年といったレンジの話ですね。しかし短期的にはもっとずっと強気です。例えば今後6カ月から1年半ぐらいというイメージですね。昨年の終わりぐらいから日本株も含めてかなり急速な上昇をしたので、今は少し調整局面にあります。まだ強気相場は続いていると考えています。



岡本 | アメリカを中心とする景気の回復、そして日本のアベノミクスなどに対する過剰な期待は急激に相場を持ち上げてしまった。その調整局面だということですね。

カントン | そうです。日本の株式市場を見てもかなり大幅なテクニカルな調整が必要だったのは明白でした。どのようなことがきっかけであれ、とにかく調整が起こったわけです。しかし、私が日本の企業の経営者と話をすると、彼らのムードが大幅に変わっているのを感じます。過去15年間の彼らのコメントと比べると非常に強気になっていることが感じられます。それまでは日本の経済は、ほとんど横ばいか停滞を続ける中で、経営者たちもどうしていいかわからなかったような状態でした。しかし、今、彼らは驚くほど楽観的になって



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

います。ですから、短期的に見れば、私はまだブルマーケットが続いていると考えています。しかし、今回のブルマーケットは非常に特異なものだと思います。金融セクター等を救済するために中央銀行はかなりの資金供給を行いました。過去の経験ではそのような時には、常に非常に強い相場展開があったものです。そして、そのような資金供給後1年位内にブルマーケットも50%ぐらいを達成するのが普通でした。しかし今回はそのパターンが起こっていません。今回はブルマーケットが躊躇していると言えると思います。金融緩和後、18カ月ぐらいにわたってマーケットは低迷を続けました。これは非常に特異な現象です。私が記憶する限り、1974年、1987年、1997年の東南アジア危機などの時も、中央銀行は大量の資金供給をしました。その結果、18カ月のうちに大幅な相場上昇があったのです。今回はそれが起こっていません。それを考えると、その意味で、まだブルマーケットは未成熟です。ですから、私は今後一年ぐらいは、強気相場が継続すると思っています。その終わりの方にはバブル的な現象が起こるかもしれません。私の個人的見解ですけれども、2年ぐらいの内にはバブル現象が発生するかもしれません。

岡本 | この未成熟なブルマーケットが始まったのはいつ頃だとお考えですか？

カントン | そうですね、2009年3月ぐらいからではないでしょうか。もちろん、将来を予測することはたくさんの要因が関係してくるので極めて困難なことです。政治的な面での大きな変化が影響することもしばしばあります。国際情勢も関係するでしょう。中東情勢が不安定になるなどマーケットにも大きな影響を及ぼします。たくさんのことが起こってマーケットの動向を左右します。しかし、少なくとも金融セクターは何とか生き延びることができた。それで私は2012年からのマーケットの上昇局面では金融セクターがリーダーとなるだろうと予測したのです。しかし、ここから先は金融セクターがリーダーになるとは思えません。なぜなら、金融セクターに対する種々の規則や規制が、その収益性を低下させる要因として働くことが考えられるからです。過去10年間の金融セクターのROEと比べて、今後はそれがかなり低下するだろうと思っています。まあ、相場見通しはそんな感じです。短期的に見ればPERもそれほど高いわけではなく、あちこちで利益の回復の話も聞きます。その中で中国は例外かもしれません。中国は過去の過剰投資のツケを払わなければならない時代に入っているのでしょう。しかし、米国は好調です。また、みんな知っているように、エネルギー価格も大幅に低下しつつあります。これはアメリカにとっても非常に良いことで製造業の復活が期待できるのではないかと思います。

岡本 | シェールオイルなどですね。

カントン | そうです。そして新しい技術開発もどんどん進んでいます。北米企業の利益率は今後、相当改善するだろうと思っています。その可能性はかなり高いと思います。北米の製造業、



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

日本の製造業のうちいくつかはかなり大きな恩恵を被ることになると思います。それら企業の利益率はかなり大幅にバウンドするだろうと考えています。そういう意味ではディフェンシブな良質の成長企業は非常に良いパフォーマンスをしています。このような方針で投資をしていますが、コムジェストのヨーロッパ・ポートフォリオも指数を過去2年間で30%ぐらい上回る素晴らしいパフォーマンスを示しています。いつも成長株というのは相対的に割高に買われているのですが、私たちはその中で、収益見通しの確実性が高く、配当利回りの高い銘柄に集中することで良いパフォーマンスは得られているものと思います。我々が注目しているような銘柄群がだんだん株式市場の中でも人気になってきているものと思います。しかし、今後のことを考えると少し話が違います。私は、これからはバリュー株が相対的に良いパフォーマンスを示す時期に入っているのではないかと考えています。金融セクターはあまりオススメできませんが、特に製造業などの割安株に投資をしているファンドはパフォーマンスがかなり良くなるのではないのでしょうか。これまではこのセクターはあまり良いパフォーマンスを示してきませんでした。これからは変わってくると思います。

岡本 | 短期的にはブルマーケットが続くというお話ですが、それはどれくらいの期間続くとお考えでしょうか。

カントン | 過剰になっている流動性を徐々に吸収し、金利なども少しずつ上昇に向かうと思っています。おそらくそのようなシナリオで世界経済は進んでいくだろうと思います。正確なタイミングはわかりませんが、徐々にマーケットを支えてきた過剰流動性は収縮していくでしょう。

岡本 | 世界的に流動性が減少に向かうとなると、日銀の異次元の超緩和政策というのも、世界経済の中で、非常に大きな意味を持ってきますね。米国を中心として、出口戦略が現実化する中で、その副作用を緩和するために、日銀が強力な緩和を続けていくというのは重要なことです。ブラックマンデーの時などもそうだったのですがその意味で、グローバルな協調体制に基づく金融政策が、非常に大きな意味を持つようになってきていると思います。

カントン | それはその通りです。一国の中央銀行が印刷をするお金というのは、その国の中に留まるものではありません。そのお金は、その国から出て行き世界の中を巡ることになるのです。

岡本 | 流動性が支えていたマーケットとは異なり、これからは銘柄の価値とか成長力が株価に反映されることになるのでしょうか。これまではマーケットの中に資金がどっどんなだれ込んでいたので、いわばお風呂の中の水位が上がっているようなものでした。でもこれか



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

らは様相が変わってきそうな気がします。

カントン | そうですね。その意味で、私は中型の製造業は面白いと思っています。特に北米の企業ですね。

岡本 | それは短期的な当面のブルマーケット中で良いという意味ですか、それとももっと長期的な視点で良いということですか。

カントン | 短期的にも良いし、長期的にも相対的に良いと考えています。個人的にも価値のある製造業企業への投資を行っています。しかし、長期的な視点から見ると、私は、世界全体でレバレッジの低下は起こると思います。それは、世界の株式市場にもマイナスの影響を与えるだろうと思っています。

岡本 | さまざまな危機が 21 世紀に入って以来起こっていますが、それらに対応して中央銀行が大量の流動性を供給してきた。さらにレバレッジ効果によって世界の株式市場はかなり高いところまで持ち上げられた。しかし、いずれこの大量の流動性はノーマルな状態に戻されなければならないものでしょう。その時は、やはり一時的には、マーケットはかなり下がることになるかもしれませんね。

カントン | まだまだ、かなり多くの企業、そして家計部門がオーバーレバレッジの状態にあると思います。アメリカの住宅投資なども息を吹き替えしつつありますし、言うまでもなく政府は大量の借入れを抱えています。日本では企業がかなりの現金を持っていますし、家計部門も大量の金融資産を保有しています。しかし、その半面、政府は大きな債務を抱えています。これがどのように解消されていくかは非常に注目されます。

岡本 | 今、お話があったように、日本企業はかなり大量の現金を保有しています。その点についてはどのようにお考えですか。

カントン | 私はそれが良いことだとは思いません。その資金は前向きの設備投資などに向けられるべきです。株主は企業に投資をするときに現金を保有してもらいたいと思っているわけではありません。事業活動を行い、それで収益を上げてもらいたいと思っているのです。なぜ日本の企業はそこまで大量の現金を持ちたがるのか、私にはよく理解ができません。いずれにしても、今後 5 年から 10 年というレンジで考えると、世界的な規模でのレバレッジの低下というのが株式市場でも大きな問題になると考えています。さらに、特に、北米における人口構成の問題が心配です。今後 2 年ぐらいは、まだいいと思いますが、その後になると米国の年金基金に対する資金の流入よりも流出の方が大きくなります。そしてそれはおそらく相当、長期にわたって続くこととなります。その意味で、アメリカは、



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

経済状態は良いけれども、株式市場はあまりよくないという状態になるかもしれません。

岡本 | なるほど、アメリカの人口そのものは移民の流入などで他の先進国よりは良い状態ですが、株式市場で巨大なプレイヤーである年金の資金のフローがネットでマイナスになるという点が問題なのですね。人口という意味ではアメリカは自国の中に新興国を取り込んでいるような面があり、他の先進国よりは人口減少が先送りされています。

カントン | 人口が増加するという事は、確かに経済そのものに対するプラス材料ではありますが。しかし、それがそのままブルマーケットにつながるというものでもありません。非常に長期に見ると、40歳以上のいわゆる働き盛りの人々の人口の比率と株式市場のパフォーマンスは非常に強い相関性を持っています。これは言い換えれば、年金基金に対して資金を拠出していく人口層が多いほど、株式市場も強いという意味なのです。今後10年ぐらいにわたって、そのような層が減少することが予測されます。その意味で、私は北米市場についてはあまり長期的に強気ではありません。

岡本 | 世界的に見て今後インフレはどのようになるとお考えですか。

カントン | それほど酷いことにはならないでしょう。技術革新もいろいろな面で起こっています。そして、エネルギー価格もまず米国で、そしてヨーロッパで、さらに世界全体でかなり低下するのではないかと考えています。中国もシェールガスやシェールオイルの生産を本格化することになるでしょう。あちこちでガスが出てきそうです(笑)。おそらく、インフレはエネルギー価格の低下によって相当相殺されることになると思います。逆に大幅な物価上昇があれば私としては驚きです。まあ、日本は政府が2%の目標を掲げていますけれどね。

岡本 | ここの所の円安傾向もありますし、消費税の増税もあるでしょう。また、アメリカを中心として流動性の収縮が起こる中、それを相殺するためにも、日本は緩和政策を続けるとすれば、先ほどカントンさんの指摘にもあったように、日本からの資金は流出することになるでしょう。これはさらに円安要因になる可能性があります。その意味では、これまで数年、世界的にはマイルドなインフレだった中で日本はデフレだったわけですが、これからの数年はそれが逆転する可能性があるかもしれませんね。

カントン | そうなると思います。日本に来て思う事は日本の物価が世界的にみて安いということですね。もちろん、円安もあり、私がヨーロッパから来ているということもあると思います。20年ぐらい前を考えてみれば、ヨーロッパから来た人は私も含めて日本でショッピングをするのが大変でした。今は、むしろ安いなあという感じです。



長期投資仲間通信「インベストライフ」

岡本 | それは面白いご指摘です。海外の有力な雑誌などでも日本の物価水準は世界で最も高いというようなランキングを見たことがあります。

カントン | 私は実感としてあまりそのようには思いません。レストランに入ってもホテルでも日本の値段は結構安いという印象が強いです。

岡本 | 円安ということもあるかもしれませんが、また、食事などにしても安く済まそうと思えば相当安く済ませるようにはなってきています。牛丼とかね(笑)。

カントン | フランスなどと比べると交通費も非常に安いです。フランスはある意味、デフレ的な状態になってきています。それでも日本の方が安い。特に日本におけるサービスの質を考えると非常に安いと言えると思います。

岡本 | 少し前にはユーロが崩壊するというような事まで言われましたが、最近のヨーロッパの情勢はいかがですか。

カントン | 状況はあまり良いとは言えません。経済についても、マーケットについても、私は悲観的に見えています。社会情勢もあまり良好ではありません。ただ、ユーロという通貨について言えば、2、3か国がユーロから離脱するかもしれないという話がありましたが、それはすでに過去の問題です。崩壊に至る最悪期は超えたと思います。同時に、スペインやイタリアなどの国々は改革を続けなければなりませんし、一方で、ドイツは、それらの国々を支援する立場にとどまると思います。ギリシャは比較的小さな国なので問題も小さいのですが、スペイン、イタリア、フランスなどについてはこれから厳しい時代が続くだろうと思います。輸出についてはある程度の回復をみせていますけれどね。

岡本 | これから世界的に厳しい状態になるのは政府の財政を立て直すという事。それは結局、多かれ少なかれ、民間部門に負担をさせるということです。その点については日本も全く同じ状態だろうと思います。

カントン | すでに税率は我々が払える上限に達しています。そのような状態で、いかにしてこの大きな問題を解決することができるのでしょうか。例えば、スペインでは若いエンジニアはスペインを去り、特にドイツで仕事に就くために移住しています。これはある意味ではいいことですが、例えば家族生活などについては、非常に大きな問題を起こします。非常に多くの人々がスペインからドイツとかモロッコに出稼ぎに行っています。低所得層の人はモロッコに行くのです。給料は半分ぐらいになりますが生活費も非常に安いのです。いずれにしても、スペインには仕事がないのですから。エンジニアはドイツに行きます。相当な人数になっていると思います。問題はこのことが家族生活だとか、社会的な安定



長期投資仲間通信「インベストライフ」

という点から非常に大きな問題を引き起こす可能性があるということです。みんな海外に出稼ぎに行く時は単身で赴任します。家族はスペインに置き去りにされているのです。所得層はスペインの北部に家族を残してモロッコに行きます。そして、2、3カ月に一度ぐらいつつ帰国をするのです。この点はあまり多くの人が指摘しているわけではないのですが、私は非常に大きな問題だと考えています。スペイン、フランス、アイルランド、ポルトガルなどで同じようなことが起こっています。ポルトガルなどだと、ブラジルだとか、アンゴラの移住がどんどん増えています。

岡本 | 中国についてはどのように見えていますか。

カントン | 私は、中国は問題を解決することができると思っています。中国は、これからは世界経済の主たる成長エンジンではなくなるでしょう。しかし、これまでの輸出依存型の経済体質を消費主導型に変えていくことができるだろうと思います。すでに世界の政治、軍事、経済の面で自分たちの立場を確立してきているので、ある程度、余裕を持って国際社会とお付き合いをしていく事はできるようになると思います。



岡本 | 日本についてはどうでしょう。昨年末以来、とにかく経済を立て直そうという動きが始まったことは事実です。もちろん、いろいろナリスク要因はあると思いますが、それでも何もしないでじっとしているよりはいい。「座して死を待つ」よりはいいと言うコンセンサスが出来上がりつつあるように思います。企業のマインドも少しずつですが改善はしているように思います。

カントン | 私もそれを感じています。

岡本 | これからのチャレンジは安倍首相が言う第三の矢、つまり成長戦略ですね。基本的に経済成長は民間部門によって成されるものです。政府の役割は民間部門が成長のポテンシャルを高められるような環境を整備することにあります。私が少し違和感を覚えるのは、政府が成長戦略を強調している割には、民間企業、特に大企業はそれほど大胆な成長戦略を出していないということです。その辺に何か日本企業のアニマル・スピリッツ



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

の足りなさを感じて仕方ないです。

カントン | 経団連、企業などが成長戦略に自信を持っていないということですか？

岡本 | 自信があるかないか、ということよりも、これまでのやり方にしがみついているという面が大きいのではないかと思います。現状を維持することが大きな目標となってしまう、現状をいかに変え、より高い成長率を達成していくかということにあまり意欲が感じられないように思います。先程、お話しが出た企業が現金を抱えすぎているというのも同じような理由に思えます。確かに小さな企業では元気のいいところも出てきているのは事実ですがね。

カントン | 年金基金や生命保険会社なども株主としてそれほど強いプレッシャーをかけていない。その点もあまり変わっていないですね。

岡本 | しかも、新卒の学生などに聞くと、やはり安定した大きな会社への就職を望んでいる。それもちょっと寂しい気がします。学生まで安全志向の体質になっている。本当にやる気のある学生は日本を飛び出します。しかし、そのような学生数は非常に少ないです。

カントン | 興味深い現象ですね。そのようにして自然に少しずつグローバル化が進んでいくのかもしれないですね。

岡本 | ところでカントンさん、立派な御本を出されたようですね。

カントン | はい。私がこれまでコレクションしてきた日本の芸術品を含めて日本の美しさを紹介する本です。

岡本 | 綺麗な写真が沢山入った素晴らしい本です。カントンさんの大好きな蒔絵の万年筆の写真もたくさんありますね。日本のアートに興味のあるインベストラ이프の読者の方も是非見てもらいたいですね。今日はお忙しいスケジュールの中非常に貴重なお話を聞かせていただきありがとうございました。(カントン氏の書籍についてはコムジスト・ジャパンの山本和史氏までご連絡ください)

生き延びる力～戦中・戦後の体験談を聞く（前編）

岡本 和久

8月15日は終戦記念日です。1945年8月15日、玉音放送によって戦争が終わりました。戦中、戦後の体験をされた方々もだんだん減ってきています。しかし、極限状態を体験された人々の強いこと。多少のことでは動じない「生き延びる力」を感じます。平和が長く続き、安楽な生活に多くの人が慣れ親しんでいます。それはとてもありがたいことです。しかし、また、何か大切なものをわれわれは失いつつあるのかもしれない。その意味で、今、戦争体験を文章の形にして皆さまにお伝えすることは意味があるのではないかと思います、今月と来月にわたってこの企画をお届けする次第です。

2011年3月11日の震災はわれわれの魂を揺り動かす出来事です。多くの方々が筆舌につくせぬ苦しみと悲しみを抱えられました。しかし、若くして戦災を体験された人たちが強烈な生き延びる力を得られたのと同様、これから多くの「強い」若者がたくさん出てくることだろうと思います。そんな確信を持ちながらこの記事を書かせていただきました（なお、取材記事は私が取材録音したものをできるだけ忠実に文章にしたものです）。

壮絶な引揚げ、極貧の戦後を生き延びてつかんだもの

上田卓さん、上田早苗さん

上田卓さんは読売広告で取締役を務められた後、現在、ティー・エム・ジェイの専務取締役としてマーケティング・プロデューサーをされています。上田卓さんの妹の上田早苗さんはイギリス、スイス、アメリカ、香港、タイなどで日本語教師として海外勤務を経験、現在は日本語教育アドバイザーとして活躍、同時にフリースクール「上田学園」を主宰されています。

◆上田卓さん

私は1937年に、今は中国ですが満州で生まれました。父は満鉄（南満州鉄道）の技術畑の人間でした。母も同じく満鉄の研究畑の人でそこで二人が知りあって結婚、そして私が生まれました。葫蘆島（コロトウ）というところに住んでいました。その後、大連に長くいましたが、とても幸せな生活を送っていました。中国人の女中さんや畑を手入れしてくれる人などもいました。

父親は満鉄にいたということもあり、ある程度、戦局の実情も聞いていたようです。たまたま、1944年（終戦の1年前）大連港の埠頭に焼夷弾がひとつだけ落ちたのです。それがどうもアメリカ軍のものようだというので騒ぎになりました。父は、これはいよいよ米軍が満州にも来るだろうということでわれわれ家族を疎開させたのです。ハルピンの先に綏化（スイカ）というところがあります。そこから先はソ連領です。日本はソ連とは不可侵条約を結んでいましたから、北の方へ避難すれば大丈夫だろうと考えたのです。父は大連に残り、われわれ母親と私と弟3人とメイドさんなどを連れて移動をし、綏化の日本人町に落ち着きました。綏化での生活も幸せでした。ある意味、戦後、日本に駐留していた米国人のような生活だったのです。今から考えれば天国でしたね。そこで終戦となったのです。



終戦の当日、私は夏休みで家にいましたが、あの気丈な母がワーと泣きだしたのです。ラジオが鳴っているのですが、私は意味がわからない。なぜ、母親が泣いているのだらうと思い、私はオロオロするばかりでした。「お母さん、なぜ泣いているの？」と聞いてもわからない。夕方、まだ、明るいうちでしたが、母が私に「弟たちを集めて」というのです。母の部屋で車座に正座しました。そこで母は「実は、日本は負けたのよ。天皇陛下さまがそういうお話をされて、もう、日本はなくなるのよ。私たちももう生きてはいけない。それで、今日、ここでみんな一緒に天国へ行きましょう」というのです。母は何か青酸カリのようなものを持っていたようです。それを水に溶いて渡されました。「これを飲むと天国に行けるのよ」と母が言うのです。そして、本当に飲む寸前までいきました。でも、そのときどういうわけか私がそれを止めたのです。どうして止めたかかという、「お母さん、お父さん、帰ってくるんじゃないの？ 僕たちだけが天国に行ったら、お父さんかわいそうだよ。お父さんが帰るまで待とうよ」と言ったのです。それで母親も正気に戻ったのだと思います。とにかく、それではお父さんを待とうということになったのです。それで生き残ったのですが、それからが実は大変でした。

ソ連兵が拳銃を持ってどんどん入ってきて略奪、暴行を行います。ソ連兵の多くは罪を犯してシベリアに送られた人たちです。兵隊といっても「弾よけ」ですよ。彼らがどんどん入ってくる。中国は軍隊を持っていなかったので一蹴されてしまった。あるとき、若い娘さんがうちに逃げ込んできた。そのあとをソ連兵がわめきながらどやどやと入ってきた。その娘さんを犯そうとしていたんですね。母はすぐにわれわれ子どもたちに「お便所に隠れなさい」と言いつけました。そのあと、外では大騒ぎがあってソ連兵が出ていった。母がわれわれを出してくれましたが、その娘さんはワンワン泣いている。そのようなことがあちこちでたくさんあり、その当時のことでもあり、自殺をした娘さんもたくさんいたと聞いていた、と聞いていました。



その後もなかなか父親が帰ってきません。理由は明確でした。当時、満鉄の課題は関東軍の日本兵をシベリアに送ることでした。そのための鉄道の操作は中国人だけではできなかったのです。そのために父親も手伝われていたんですね。綏化はシベリアに行く最後の給油地でした。電気でも動く電車ではない。蒸気機関車は水と石炭が必要です。ほとんどが貨物列車で屋根がありません。そのなかに日本兵が動物のように缶詰になっている。それをソ連兵が自動小銃を持って見張っている。逃げたらすぐに撃ち殺される。燃料を綏化で積んでいる間、ソ連兵は暇です。そこで人間を的にした射的をするんです。私も狙われました。母親には絶対に外に出てはいけなと言われていたけれど、こちらはまだ幼い子どもです。目を盗んで外に出る。友達と二人で外で話をしていた時に、たまたま、そこに中国人が通り、その中国人がひっくり返ったのです。見ると撃たれているのです。中国人がみんな集まってきて大騒ぎになりました。これは僕が初めて人が殺されるのを見た瞬間でした。それが私は8歳のときでした。

それから引き揚げになりました。兵隊はシベリアに連れて行かれたけれど、そのほかの人たちは日本に送り返すと決まっていたようです。父親も綏化によく来ることができました。逃げようとして殺された兵隊は数知れませんが、兵隊をシベリアに送り折り返してきた最後の貨物車に乗って、家族は大連に戻りました。大変な数の人たちが押し込まれていましたが、朝になるといなくなっている人もいました。おそらく汽車から落ちてしまったのでしょう。汽車が途中で止まってしまい、そのあと撫順(ブジュン)まで歩きました。そこに収容所のようなところがあり4カ月を過ごしました。そこで生活していたのですが、食べるものもありません。中国の人が食べ物をくれたのがありがたかったです。

撫順にいたときに弟が一人亡くなりました。栄養失調です。中国でも蒋介石と毛沢東の戦いが激化して、それに巻き込まれて撃たれて亡くなった方もたくさんいました。そして、その収容所の中で生まれたのが早苗です。母が穿いていたモンペのなかで生まれました。というのは、母親は妊娠していたのですが、お昼の食べ物を探すために動き回っているうちにモンペのなかで急に生まれたのです。周りの人が「あ、生まれる！ 奥さん、寝て、寝て」と叫んだと言います。

◆上田早苗さん

それが私です。

◆上田卓さん

この子は多分、生きながらえることはできないだろうとみんな思っていた。そんなとき、中国人が「子どもをくれないか」と聞いてきました。父親は「このままでは生きていけるかどうかわからない。子どもだけでも中国人にあげよう」と言ったのですが、母親は「どうせ死ぬならみんな一緒にのほうがいい」と言い、それは実現しませんでした。そこから葫蘆島に汽車で行くことができ、そこにアメリカ軍の貨物船が来ていたのです。その貨物船で数日かけて舞鶴に帰ってくることができました。船で食べたアメリカ軍のスープとパンがいかにおいしかったことか。生まれてからこんなにおいしいものは食べたことがないと思ったほどでした。ほとんどまともなものはずっと食べていませんでしたからね。

舞鶴から東京に引き上げ、麻布中学のすぐそばの倉庫が引揚者寮となっていたのでそこに落ち着きました。ローンテニスクラブが近くにあり、アメリカ人がテニスをしていました。テニスボールが場外に飛んで来るとそれを拾って食費を稼いだりしました。父は満鉄もなくなってしまって、仕事もない。それでガードマンのようなことをしていました。私のすぐ下の弟も栄養失調で亡くなりました。男の兄弟が四人いたうちの二人、一人が中国で、一人が日本で栄養失調で死んだのです。今でもよく覚えています。母親が「さんざん苦労して、せっかく日本にまで帰ってきて、もう大丈夫と思ったとたんに死んでしまった」と泣いていました。私はがむしやらになんでも食べるタイプでしたが、弟は好き嫌いがあり、母が「好き嫌いはだめよ。好き嫌いがあると、結局栄養を摂れなくなってダメになってしまう」とその後もずっと言っていました。棺もなかったのです。ミカン箱を改造してそれお棺にして荼毘にふしました。



◆上田早苗さん

麻布の引揚者寮で、朝起きたら天井に空が見えるのです。台風が来て屋根がすべて飛ばされてしまったこともありました。

◆上田卓さん

父がガードマンで、母はアルバイトをしていました。父は夜勤も多く、結局、私が長男だったので家事は私が見よう見まねでやっていました。弟たちと一緒にやっているうちに、だんだん知恵がついてできるようになってきました。当時、水泳の古橋広之進ががんばっていました。私も水泳をやっていたんです。かなり上手でみんなにほめられる。それが何か生きる力になっていました。そういう意味では何か前に向かって進んでいました。やはり、引き揚げまでの極限状態があったので、それと比べればずっといい。あの苦しみがバネになっていますね。今、若い人にも「ありがたい世の中でそう簡単に殺されるわけではない。どんな大変なことがあったって、そこがどん底でそこからよくなると思えばいいじゃないか」と話しています。人間の世界って面白いものです。みんな、一生懸命に必死で生きていました。

引揚者寮には小学校6年までいました。いろいろな所で引揚者寮ができていたので6年のときにそこを出て、三鷹の寮に移りました。それで少しずつ生活も安定してきた。

◆上田早苗さん

私は有栖川公園近くの幼稚園に行っていました。大使館が多いので外国人の子どもが多いんですね。外国人の子どもが泣いているのを見て、家に帰って「お母さん、キューピーちゃんが泣いてたよ」って報告をしたりしたものです。「何かね、四角いものがあるってね、それを食べているんだよ」と報告する。いま思えばサンドイッチです。日曜日にはパンを買ってもらえました。兄たちは私のために一つだけコッペパンを買ってくれました。それを有栖川公園に座って食べました。それが本当においしかったです。学校の給食もとてもおいしかったです。今から考えればとても食べられない味でしたけど。周りがみんな貧しかったので。

よく覚えているのは、みんなでケーキを「見に行きました。食べるのではない、見に行くのです。ケーキ屋さんが近所にできました。そこにクリスマスのケーキが飾られていて、ケーキの家の横にお菓子のトナカイがありました。母がそれを見に連れて行ってくださいました。「これはね、ケーキと言って食べられるのよ」って教えてくれました。「本当にこれが食べられるの？」と聞く私に「そうなのよ。クリスマスっていうキリスト教のお祭りがあって、そのときにこれを食べるのよ」と教えてくれ、それを見に行くのが楽しみでした。何度も行ったものです。

母は「貧しくてもいろいろなことを知るべきだ」と考えていました。それで、本当にボロボロのかつこうだったのですが、国会議事堂などいろいろな所に連れて行ってくださいました。武蔵野市に引っ越すことを決めたのも教育を考えたからだと思います。もうひとつの引っ越し先の候補は品川でした。そのほうが仕事は多かったそうです。でも、三鷹駅前には母の大好きな国木田独歩本、『武蔵野』の碑もあるし、教育には三鷹のほうが良いということでこちらにしたそうです。

◆上田卓さん

賃貸の引揚者寮でした。長屋のようなアパートでした。みんなが助け合っていました。当時の私の楽しみは映画でした。欧米の映画を、アルバイトをして得たおカネで観に行く。映画のなかは世界が違うんですね。ですから、映画を観ている間は、楽しい、おいしい世界がある。そこに2時間ぐらいいる。出てくると「ああ、よかった。次の映画を観るまでがんばろう」と思ったものです。世界の差を感じましたね。アメリカ人家庭の使用人をしている家の子どもが友人でした。その家に行くとアメリカ人からおいしいものをもらえる。それを食べさせてもらえることも楽しみの一つでした。時代の知恵というのでしょうか、極貧のなかでもお互いに助け合い楽しみを見つけました。



現代の日本を見て一番気になるのは「心」ということです。マスコミなどで餓死などのニュースが取り上げられています。でも、本当のことをいったら、少し考えれば生きられないことはない。仕事だって選ぶから。俺は捨てられたとか、俺はダメになったとか言っているけれど、それは多くの場合、心の問題です。少し、心のあり方を変えれば道が開けてくる。苦難は人を成長させます。どん底で「よーし！」という心が必要なのです。戦争がいいわけではないが苦難は必要です。苦難が人を強くする。苦難のない時代が長く続いたので、みんな弱くなってしまった。「なんでそんなことで、自分がダメだといって自殺しちゃうの」と思うことがとても多いです。大学卒業して3カ月ぐらいで、せっかくな就職した会社を気軽に辞めてしまうんですね。考えられないですよ。昔だったらビンタをしてでも残させます。今、そんなことしたらすぐ新聞ダネになってしまう。鍛える側も厳しいことができない。鍛えられる側はすぐにいなくなってしまう。ですから、私から見ると今の社会って幸せそうに見えて意外に不幸だだと思います。

◆上田早苗さん

今、「みんなぼっち」という言葉があるそうです。みんなというけれど一人。政府がいろいろと援助するけれども、人間の尊厳が大切にされていない。何か大切なものが骨抜きになっている。福祉という名のもとに一番大切なものが失われている。それが孤独感になっている。

◆上田卓さん

最近は何かが足りなければすぐそれを与える。でも、「足りなければ作れ。それを応援するよ」というのが本当の姿です。政府もおカネさえ出せばいいと思っている。何か欲しいと小さい子は「ママー」と泣き叫ぶ。泣くのを止めさせるために欲しがるものを与える。そういう子どもたちが今、大人になっています。怖い話です。モノがありすぎるのも人間社会にとって問題ですね。若者に言いたいことは、人間も、すべての動物もエゴの存在だということです。みんな、自分がよくなりたいと思っている。ただ、自分が幸せになるためには人とつながりが大切です。人を大切にしなければ自分は幸せになれない。一時的でもいいから自分を少し引いて相手をたてる。そうすればその人は決してそれを忘れない。自分が困ったときに助けてくれる。弱肉強食の動物の世界でも、結局群れを作って助け合っている。「最大のエゴのためには人を助けよ」ということを一番言いたいですね。自分の取り分を減らしても人に譲る。それが自分のためになる。気がついたら自分が一番幸せになっているのです。

若いときの苦労は買ってでもしろ！

田中義博さん

新日本証券副社長、太陽投信(現新光投信)社長を経て現在、太陽インベストメント・アンド・コンサルティング代表取締役。ニューヨーク、ロンドンなどに駐在経験を持つ。

僕は昭和7年、1932年の生まれです。今年10月に80歳になります。父は、当時のブリジストンのいわゆるノンキャリアの職工長でした。夜間の工業専門学校しか出ていない技術者でした。同社は地下足袋から始まった会社でしたが、すでに自転車、自動車、戦闘機・爆撃機のタイヤ、靴(軍靴)などを作る会社で、いわば軍需産業だったのです。ある程度、戦争が始まることはわかっていたんでしょね。同社は青島とジャカルタ、そして台北に製造拠点を作ることを決めたのです。父は台北の工場を作れという命を受けて技師四人で赴任しました。それが昭和12年です。私を含め家族は昭和14年に父と合流、小学校1年生でした。当時、台湾には日本人が60万人いました。完全な日本の植民地です。台湾府の総督は陸軍大将か、海軍大将。父は技術の親玉で、下に台湾人が5~600名いました。子どもを戦争に行かせたくないで富裕層の台湾人は息子を軍需工場に入れたいわけです。軍需工場で働いていれば軍隊に行かないでよかったのです。それで台湾人の金持ちがいろいろなツテを頼って息子を入れようとしていたのです。



私は台北一中という日本人学校に入学しました。約50人のクラスで、そのうち4~5人が台湾の富裕層の息子でした。中学は台北一中が原則、日本人だけ、二中が台湾人だけ、そして三中は日本人と台湾人と分けられていた。私の入った一中にはごく少数の台湾人がいたのですが、彼らはものすごく優秀でした。成績トップはいつも彼らでした。彼らは日本が追い出された後、みな立身出世をしています。

中学には入ってもほとんど勤労働員で勉強はしませんでした。1、2年生は勤労、3年生は軍隊に組み込まれていました。すでに、米軍は沖縄に上陸をしていました。次は台湾だという危機感が高まっていました。まあ、「たぶん敗けるのだらう」と思いつつ軍需工場などで働いていました。空襲も日常的で随分多くの人々が死んでいました。顔のない死体がゴロゴロしていました。わが家も沖縄から逃げてきた人のための避難所になっていました。総督府に1トン爆弾が落ちました。地下まで貫通して地中で爆発するのです。すべてが飛ばされてしまう。学校も半分は崩壊しました。

終戦を迎えたのは中学1年のとき、そのときは農業試験場に動員されていました。暑い日でした。天皇陛下の玉音放送があるとは聞かされていましたが、ザー、ザーという雑音ばかりで何も聞こえない。終わったら先生が「敗けた」と言ったのです。両親も軍需産業に勤めていて戦況がわかっていたので、それほどのショックはなかったように思えました。戦争が終わって1週間ぐらいで授業が再開しました。先生たちは立派でした。英語の授業も始まり、数学も物理も化学も日本語の国語も、そして中国語も開始されました。後年、仕事で中国に行ったとき「あなたの中国語の発音はいいね」とほめられたものです。そのころから台湾人同級生の報復が始まりました。クラスのガキ大将だった男は学校の帰りに待ち伏せされ、ひどい目にあわされました。幸い、僕はガキ大将の子分でしたから直接的に暴力を受けたことはありませんでした。台湾人学生連盟というのができて暴力で報復する。戦中はガキ大将が台湾人を殴っていた。それでも彼らはだまって我慢していた。まさに報復でした。授業が始まる前に学生連盟がダミーと教室に入ってきて黒板に大きく「犬」と書く。中国で犬というのは最大級の侮辱的な言葉です。「貴様たちは犬だ。このなかで台湾人の同級生をいじめた奴は立て」と言われる。しかし、誰も立たない。立ったらやられる。そうすると「やっぱり犬だな」とあざ笑いながらガキ大将を殴る。



終戦までは工場などでも台湾人の職工を殴るのは日常茶飯事でした。戦後、父のところにも報復が来ました。幸いに叔父が陸軍軍曹だったのです。父は彼の所属する分隊を工場に動かせるという便宜を図っていた。槍、刀などを持った中国人が報復に来たときに、すぐ私は叔父のところへ飛んでいった。「おじさん、来たー！」と叫んで飛び込むと叔父などは銃剣や刀を持って助けに来てくれた。わが家でも押入れのなかに日本刀を隠し持っていました。それは使わないですみました。倉庫なども武装強盗団に襲われたりしていました。守衛さんは頭を槍で突かれながらも守衛室まで走りサイレンを鳴らしました。サイレンを聞き、銃剣

道5段、剣道名誉7段だった父は防空頭巾をかぶってわが家の日本刀を持って駆け付けていました。トラックで台湾人部落にまで追い返す。そのようなことはたくさんありましたが、満州でロシア軍が攻めてきたというようなことはなかったですね。やはり、日本が台湾ではいい政治をしたということがあったのではないかと思います。あくまで個人的な怨恨を晴らすという感じでした。

私が病気で寝ていたときの事です。父は米軍の良い毛布を手に入れていました。その毛布で私が寝ていたのです。そこに中国人の警察官が靴のままわが家に入って来ました。大きな拳銃を突きつけながら「この毛布をよこせ」というのです。母は懸命に日本語で説明して泣いて頼んだ。結局、他のものを持って帰りました。そんな生活をしつつ昭和21年4月に帰国しました。国家を失った民族の悲哀をしみじみ感じましたね。

帰国して父の兄の家に居候となりました。親子7人が6畳一間と3畳、しかも、そこは養蚕のための部屋でした。父の兄は貧乏百姓だったのです。しかし、農地解放になり大地主の土地をもらえることになった。それである程度の自作農にはなっていました。幸い父はブリジストンに復帰できた。何階級か格下げになり、父は随分悔しがって泣いていました。当然、給料も下がる。とても安月給では7人家族を養うことはできない。当時としてはみんな生きるためにやっていたことかもしれませんが、闇の取引などにも手を貸していたようです。中学生の私も闇の品の運び屋まがいのことをさせられました。早朝に墓場で商品を渡すのですから、いくら子どもでもこれはよくないことなのだとわかりますよ。でも、生きるためにはそれも仕方なかったし、みんなそうやって生き延びるために何でもしていたのです。

戦争中に父は兄に3000円送金していました。帰国したら家を買おうと思っていたのです。昭和15～16年ごろですから3000円もあれば家を買えたのです。ところが叔父はそれを銀行に入れてしまった。そうしたら、預金封鎖です。一人500円しか預金を下ろせない。しかも、戦争に敗けて帰ってきたら3000円といっても米20～30キロぐらいしか買えない。大インフレが始まりつつあったのです。とにかく絶対に物がなかった。

半年ぐらいで叔父の家をでて、父の実家のあった博多から15キロぐらいのところの社宅に入れました。父は何としても田んぼを買わなければならないと思っていたようです。とにかく、6000円ぐらいで棚田を買ったのです。博多の町まで流れる大きな川の支流の上流にありました。良い米が取れるのです。その棚田を耕す仕事が私と弟にまわってきました。当時は化学肥料などありません。そこで叔父の家にある牛車を借りて、空の樽を満載にして、博多の町まで15キロ行って肥えを買って歩くのです。人糞の汲み取りですね。隔月に一升ぐらいのコメを渡して売ってもらっていた。お得意先が何十軒かあったのです。樽を人糞で満載にして、それからまた牛車で15キロ帰ってくる。とにかく、そうして苦勞して30万円ぐらいのカネを貯めたんですね。それでまた、別の家と田んぼを買ってという風にして増やしていったんです。

高校に進学するときに、叔父は私を線路工夫にしようと考えたようです。父は「自分は学校に行っていないからこの子は行かせる」ということで進学しました。大学に入試するときも九大に入れなかったら就職しろと言われていました。結局、九大に入学して、大学を昭和30年に卒業しました。学資は全部自分で調達しました。奨学金ももらい、アルバイトをして、衣類まですべて自分で稼いだカネで賄いました。父は会社を辞め、雑貨と野菜を売る店を始めました。少しずつ土地も値上りを始めました。さらに雑貨屋を処分して今度は西鉄の駅の前に土地を買い、書店を始めました。すぐそばに高校ができるという情報を得ていたのです。書店をやりつつ学校や役所に入出入りしているうちに市会議員になりました。次に書店も売却し、自宅のそばにビルを建てました。その意味では5人兄弟で本当に苦労したのは上二人、下はそれほど苦労はしませんでした。まあ、もちろん、今の若者とは比べものにならないでしょうけれどね。父は市議員を16年勤め、勲六等の勲章まで最後はもらいました。



必死の思いと覚悟でもって大日本帝国のために国民皆が力を合わせて頑張ってきたが、祖国は米国に破れました。当時、台湾にいた日本人は1945年8月15日をもって祖国を失ったのです。青天白日旗を振りながら天稗棒と銃と身の回り品を担いで行進していく支那兵を出迎えさせられたあの屈辱は忘れられません。強い祖国があつての国民の生命・財産の安全です。父は身の危険にもあいました。そして、すべての財産を失いました。

私は1972年に初めて米国ニューヨークに赴任しました。超大国アメリカの巨大な力に圧倒されましたが、逆に「俺は日本人」である、いくらアメリカに敗れたとはいえ、日本人としての魂まで失ってはならない。必ずや日本を復活させ、欧米列強に伍してその存在をあらしめる国にしたい。そのために力の及ぶ限り、自分の専門分野(投資銀行業務)で欧米の大金融機関に恥ずかしくない仕事をしたいと念じながら今日まで頑張ってきました。

若い人たちへのメッセージですか? 「若いとき、苦労は買ってでもしろ」ということです。そして、「その苦労に向かっていけ。苦労をすると新しい自分が見出せる」ということでしょうね。「若い人たちよ、今からでも遅くない。世界に飛び出して行って日本人の存在を示してもらいたい。そのためにはわが国の歴史・文化を改めて学び直し、かつ、相手国の民族・歴史・文化をしっかりと勉強してほしい」それを一番、言いたいですね。

空襲敢闘記

岡本 茂和

私(岡本和久)の父(岡本茂和、1917年生れ、2000年没)は「空襲敢闘記」という随筆を残しています。1945年5月24日の深夜にかけて一家の住んでいた東京都目黒区大岡山付近が空襲にあい、辺り一面が焼け野原となりました。そのなかで父をはじめ親戚や近所の人たちが必死に自分の生活を守っている様子が書かれています。国と国との戦争に翻弄される民衆、そのなかで必死に自分たちを守る人々、今から60数年前にあった事実を風化させないためにも皆さんに読んでいただきたいと思い、ここに掲載させていただきます。

昭和二十年五月二十四日午前零時半頃であつたか、確かな記憶はないが突如警戒警報を知らせるサイレンが鳴り響いた。早速、ラヂオのスイッチを入れると敵数機が帝都に近接しつつある旨放送している。考えて見れば前回以来一ヶ月余、昼間一度立川へ多数機で来襲したのみにて静寂に戻っていた帝都であつた。其間約一ヶ月、吾家に於いても大きく時を稼いでいた。その前夜、疎開先の祖母様から御手紙があり次の便で送らねばならぬ品物を話し合ったりしながら、今月から御米差し引きとなった丸パンを食べた。しかも丸パン一日分二個を一度に「うまい、うまい」と頬張り、残っている御飯でお茶づけを食べ、寝しなには更にその日小生が会社で配給された海宝麺を「ひじきと変わらぬ」等云いながらお皿一杯試食して、それこそ超満腹感を吃しながら九時前後床に就いたのであつた。

サイレンで起こされた時も又、敵大軍来襲の報道を聞いた時も、実に吾ながら平常と変わらず、寧ろより以上に落付いていることができたのは実は前夜の栄養食が腹に一杯ありそこから力もりもりと泉の如く湧き出していたからであった。当時、ラヂオは不絶情報を伝えていたが記憶にない。只刻々と迫る敵夜間大空襲の前ぶれを放送していた様だ。始めて隣組防火郡副部長の腕章をつけた。何だか急に力がついて来た様な気がした。みどり(妻)もすばやく自身の用意を整え持出す荷物を玄關に揃えていた。みどりと二人で順序よく完成したばかりの中壕にハシゴをつたって先ずトランク立てに信玄袋、それに其前日持ち帰った海宝麵の一包、座布団、蒲団包等を押し込めて蓋をした。門の傍の壕にも木箱等入れて先ずはこれで一安心と云う処だ。

照空燈に照らされて敵機が一機、又一機、三四千の高度であちこちを飛び廻る。見る見るうちに南方の空がまず赤くなる。次いで北方の相当はなれた処にバラバラと焼夷弾が落ちて行くのが花火のように見える。と突然頭上を通った一機から落としたのであろう身をつんざく様な落下音と共に成功館付近より火の手が上がった。愈々身近に落ち出したかと思うと思わず身のしまる感がする。空からは焼夷弾の油片が赤く燃えながらあちこちに落ちる。前の畑にも一つ。早速とび口でたたき消す。桜の木にもひっかかって燃えている。皆盛んにガヤガヤ叫び声を立てて消火に懸命だ。これなら「延焼の心配なし」と思ってすぐ家の前に戻り上空を警戒する。盛んに火のついた油片が落ちて危険極まりない。特に家の垣根によくひっかかる。小さい油片なのでたたけばすぐ消える。があちこちなので漸く忙しさを増して来た。

折から家の真西より飛来してきた敵一機、頭上より約五十度位手前にてバラバラバラバラと火の粉が落下した。「これはいかん」と思うとたんにザーザーと云う物すごい落下音、思わず門前の街燈に身をよせた瞬間、パリパリ、ツドン、パリパリ、ツドンと云う屋根を貫く音。火の手は我家よりわずかに南へ三軒目の家の前当りから上がった。皆、消火を始めたのでこの分なら延焼は大丈夫と又しても危中の一安心を見つけた。がしかしそれから一、二分も経ったであろうか、又も同じ西方上空に一機来襲、同一個所で焼夷弾を落下した。今度は駄目かと思う一瞬、火の手は家の前の谷を横切って落下。一本の帯となって火を吹き上げた。始め風向は北風で成功館の方より火の粉の飛来するのが心配だったが後には西風になり谷向うから吹きつける。前の谷の溝より南は火の海だ。隣が焼ければ家が危ない。取るものも取り敢えず駆けつけて水をかける。隣には若い女の人がおり小生二人にて水をかける。たちどころに用水槽の水が無くなる。家のも無くなる。然し一軒先の家の火はいよいよ燃え盛る。風呂場の水に気がつき一生懸命に隣のはめ板に水をかける。体は水でぬれてぐしゃぐしゃ靴も目茶苦茶、ブカブカしてすぐぬげる。風呂場の水もたちまち使いつくした頃、火は残念ながら隣の二階に移り始めた。二階には水がとどかない。その上その水さえ遂に補給がつかぬ。「もう之までだ」、自分の家を守ろうと思って家に引き返した。

家の台所近くに来るや否や又々新しい焼夷弾が次、次へと落ちている。此時、一発は異様な音を立てて遂に吾家の台所天井を貫いたらしい。外より見ると台所中、硝子越しに真赤になっている。「畜生！遂に落ちたか」、今迄、今の今迄は大丈夫と置いていたが。体は隣家の消火で既に疲れ切っている。台所の木戸口に走り寄ったら運悪く中から閉って開かない。力にまかせて木戸をたたき破り中に入る。既に台所中、一面、火の海だ。中に入ったが水が無い。水道は勿論出ない。大声で叫んだが誰も居ない。どうにも手のつけ様がない。困った揚句、家の中に駆けて行った時、ふと足許の掛蒲団に気が付いた。「これだ、これだ」とすぐ大きな掛蒲団を一枚ひきずる様にかついで来て台所の戸棚の前の火点にかぶせて足でふみつけた。蒲団の四方から火がふき出る。丁度此時、近所で人が小生の声にかけつけ、一、二杯水を呉れた。蒲団の上からかけたが大した効果もない。そこへさらに近所の人が水をもって駆けつけてくれた。すぐかける。然し次の水までの間が長くて火は仲々劣えぬ。このとき天佑か神助か、蒲団で火力を押さえているそのすぐ下に土釜が二つあり、しかもその土釜に夫々水が一杯入っているではないか。「これだ、これだ」、すぐお釜二杯の水で蒲団をぬらし次の水を待つと不思議と急に火力は劣え始めた。「しめた、しめた」、もう大丈夫だ。そう思っている中、ご近所の人たちから夫々数杯の水補給あり遂に消し止めた。

「消したぞ」、大声で叫んで台所から出るや否や、今度は隣家の二階が炎々と燃えている。今度は「家に水をかけろ」と叫びながら一心不乱に水をかける。裏口よりみどり、隣に住む叔父一家、皆代り替りに庭より水を持って来て小生に呉れる。羽目板にどンドン注ぐが、すぐ湯気になって消えてしまう。吾家もついに燃えるかと思ひ荷物を運びだすことを考えたが、すでに壕にいろいろな物のみどりが入れてあったので安心。焼けても大丈夫と思いつつも、此の後、いよいよ最後に持出すべきものを頭の中で数え上げた。御位牌、ラヂオ、自転車…。しかし、家は燃えぬという信念の下に消火しているのだ、これらのものは最後まで持出さぬと決心、消火に専心する。もしここで持出せば皆の気持ちが乱れる事を恐れたからだ。こうしてどンドンどンドン水をかける。家の井戸、隣の井戸と両方から補給して呉れる。

周りでは「あと五分だ、頑張れ頑張れ」と連呼している。小生もそれに呼応して水をかける。既に炎はこちらになめかかって来る。顔が暑い。焼けつく様だ。思わずバケツの水を頭からかぶる。数分経つと又耐えられなくなる。又水をかぶる。全部で明け方まで何杯かぶった事だろう。バケツリレーの水もなかなか間に合わぬ。そこで杓子でドブ水をかける。全く夢中で水をかけていたら遂に最悪の場面に直面した。即ち炎上している隣の二階が家の上に押しかぶさって倒れかかって来たのである。愈々絶体絶命、思わず持っていた柄杓で支えた処が先の金の桶が取れてしまった。思わず素手にて支えはねかえた。そばで叔父様が「手では危ない、何かないか」とおっしゃって居られたがそんな暇はない。今考えてやけどをしなかったのが不思議な位だ。疲れた体に一心にお念仏を称えながら、神仏の加護を祈りつつ消火に縦横無尽、頑張ったのである。倒れ掛かったやけた柱も漸く火が衰え始めた。やや暫く、もう延焼の危険は去ったと思われたが未だ余燼が上がり炎は燃えている。今、心をゆるめ風向が変われば大変と疲れた体を自らはげましながら何回となくバケツの水を注ぎ込む。何時の間にか空はうす明るくなりかけて来た。時計を見たら四時過。一同、思わず顔を合わせお互いの敢闘を祝しながら先ず無事を喜び合った。小生もうれしかった。ご近所の人たちも来られ「四圍は全部焼けたが一軒丈残った、満願だ」と云って叫んでいる。皆敢闘したものの喜びの雄叫びだ。

この頃からどうしたものか寒さを感じる。一通りの寒さではない。悪寒だ。ガタガタふるえる。洋服も多少ぬれてはいるもののそんなに冷えている訳ではないのだが、皆に聞いて見ると皆が皆ふるえている。余り火の側で駆け回っていた反動であろう。焼け跡の火に遠くからあたりながら暖をとる。いつの間にか近所の火もすっかり下火になっている。見ると一面の焼け野原になっているので驚いた。まだ余煙と灰煙でよく見えぬがとにかく相当な被害らしい。一方、家の中は台所の焼夷弾消火の時、土足にて往来し、又、水をかけたので泥と水でぐちゃぐちゃ、畳の上にあがる訳にも行かぬ。然し焼け残ったのだ、この位はしかたないとあきらめる。腹が減ったので平常用意していた炒り米を食べる。みどりは御飯を炊く。焼け出された人の手前もあり余り仰々しくできぬのでこっそりとおにぎりを作る。小生もみどりと腹一杯、食べる。相当食い込んだ事と思いつつも、今、この時元気を出さねばと思いい遠慮無く頂戴した。お酒でもあれば大いに祝杯を上げる所だがそれどころではない。次の空襲にそなえて対策をねりつつ喜び合うのであった。

(次号に続く)

生き延びる力～戦中・戦後の体験談を聞く（後編）

岡本 和久

先月に続き、戦中・戦後の体験談を伺いました。痛感するのは、いかにわれわれがいる現在の環境が恵まれているかということです。このありがたい状況で、いかに「生き延びる力」を磨くのかというのは大きな課題です。せめて、あらゆることにチャレンジしていく気持ちを持ち続けることが大切だと思います。最後に島田知保さんと対談をさせていただきました。

鳥山百代さん

現在、83歳の鳥山さんは京城生れです。今はお孫さんたちに囲まれ、相変わらず活発に活動されています。しかし、まったく普通の「女の子」が体験した戦中と戦後は想像を絶するものでした。

初めて見る日本は緑がきれいだった

私は1928年(昭和3年)に京城、現在の京城(ソウル)で生まれて、今年で83歳になります。父は広島安芸吉田の農家の四男で、新天地を求めて韓国に行き、製麺業を始めました。当時、韓国は日本でしたからね。母は17歳で広島から京城へ行き、8歳年上の父と結婚したそうです。仕事が軌道に乗るまでは二人ともずいぶん必死に働いたようです。京城にあった三越にも麺を卸していたと聞いています。

私が終戦を迎えたのは17歳でしたが、それまでは実に満ち足りた生活を送っていました。百(もも)お嬢様と呼ばれて、使用人もたくさんいました。私が通った小学校は日本人だけで、明洞(ミョンドン)に近い南山という所にある学校でした。韓国の人たちともごく普通に

付き合っていたと記憶しています。もちろん、日本人は支配する側でしたから、肉体労働などはせず、もっぱら韓国の人がするというようなことはありましたけれどね。

警戒警報や空襲警報が時々鳴ったり、偵察機などが来たりしましたが、実際に爆撃されることはありませんでした。しかし、灯火管制はありましたし、家には細菌戦に備えて防毒マスクなどもありました。

私は五年制の高等女学校に通っていましたが、昭和20年、繰り上げ卒業といって4年生の私も5年生と一緒に卒業させられました。玉音放送のあった8月15日は、進学した女子専門学校の夏休みでしたので家にいたのですが、ラジオの電波の状態が悪く、「以テ万世ノ為ニ太平ヲ開カムト欲ス」というところしか聞こえませんでした。でも、なんとなく「敗けたんじゃないかな」ということはわかりました。

役人や知識人の中には敗戦の前に荷物を日本に送り、ご自身も日本に帰っているという人もいたようです。でも、私たち一般人は報道を信じ、ある意味洗脳されていましたから、呆然とするばかりでした。そうしているうちに韓国の人たちが「マンセー、マンセー」と町で騒ぎだしました。勝利を祝っていたのでしょう。

姉と私は何をされるかわからないというので、家の中に囲われてしまいました。押入れに抜け穴を造ったりしました。流言飛語が飛び交い、みんな警戒していました。外へ出ないので社会の様子はあまりわからなかったのですが、デマもかなりあったと思います。ソ連や満州まではある程度の距離があったので、比較的秩序だったのではないかと思います。



姉が徴用逃れで海軍関係の職場に勤めていました。幸いなことにその関係もあって、引き揚げ列車の切符が意外に早く手に入りました。とにかく住んでいる所が日本ではなくなってしまったので、そこには居られないのです。仏壇とか、神棚、おひな様などを庭で燃やしましたが、人形(ひとがた)のものを燃やすというのは忘れられない記憶ですね。

一人が持って帰れる荷物は手で持てる範囲に限られていました。私は大きなリュックサックを持ちましたが、母は喘息の真ん中の弟をおぶっていたのでリュックを持つことができません。一番下の弟は小学校低学年なので大きな荷物は持てず、本当に大事な物だけを持って帰るだけでした。写真はアルバムから剥がして持ち帰りました。

当時、かなりのおカネを出せば、闇ルートで荷物を運んでくれる「闇船」というのがありました。両親はそれで荷物を送ったのですが、帰国後、ずっと首を長くして待っていましたがとうとう届きませんでした。

帰国するまではやかんと飯盒、お米を持って歩いていました。釜山で20日間ぐらい引揚船を待ちましたが、その間は本当に難民でしたね。満州から逃げてきた軍人さんたちがかなりいたのですが、その人たちは身ひとつで逃げているので荷物がありません。それで頼むと持ってくれたのです。それは本当に助かりました。もちろん食べ物物の差し入れなどはないですから、みんな、自分で食べ物を調達していました。まあ、おカネを出せば買えたということでしょうね。

母はかなり不利な闇ルートで日本円に交換をして、それを日本に持ち帰ろうとしました。おカネを持ち帰る方法については水筒の中に入れるとか、いろいろな話を聞きましたが、誰でも気づく方法はみんなバレてしまいます。船に乗る前に全員が身体検査をされるからです。女性の場合、韓国の女性が身体検査をしました。母は身体検査で見つからないようにするため、段ボールの波の部分の部分を切ってそこにお札を入れ、糊で貼り直してトランクのような形にして持っていました。



幸い見つからずに持ち帰れた何万円のおカネは、帰国後非常に役立ちました。当時のおカネで家が十分に建つ金額ぐらいありました。まだ戦時中の昭和17～18年ごろでしょうか、5000円を日本に送金してそれで田畑を買っておいたぐらいですから、数万円というのは大変な金額だったのです。

帰国後、その田畑で採れたもので、十分ではないけれど家族8人が芋粥で糊口をしのぐぐらいのことはできました。帰国した年もちょうど9月に帰ったので、現物で小作米が入りましたから、それは助かりました。

興安丸という船で日本に帰ったのですが、船に乗ったときに船員さんが「お帰りなさい、もう大丈夫ですよ」と言ってくれたことが本当

にうれしかったです。安堵感、もう大丈夫だという思い、これは筆舌に尽くしがたいものでしたね。私たちは子どもでしたが、両親はもっとホッとしただろうと思います。一晩で玄界灘を越えて、山口県の仙崎の港に着きました。本当に緑がきれいだなと思ったのを覚えています。緑のなかに柿の実がなっていた。それが印象に残っています。

そして、驚いたのはすげがさに緋(かすり)の着物で日本人女性が肉体労働をしている姿を見たことでした。それまでは肉体労働をするのは韓国の人で、日本人が働くのを見たことがなかったのです。「日本人がこんなに働いている」ということが驚きだったというのは、今から考えると恐ろしいことでもありますね。それから、日本にはどんな山間部に行っても立派な小学校がある、韓国では当時、小学校は義務教育はなかったと思いますので、日本での教育の普及ぶりがよくわかりました。

仙崎から下関まで貨物列車で移動、山陽本線で広島まで来ました。印象深かったのは徳山の海軍工廠が全滅していたことでした。そして、被爆後の広島に到着しましたが、そこは焼け野原。何にもない。福屋というデパートの残骸が見えるだけでした。放射能が出ているかもしれないといううわさがあり、汽車に乗っているときは絶対に外に出てはだめだと言われました。

広島を少し先の祖母の家で一泊しました。そのときに着物を脱いで、五右衛門風呂で着物を煮沸したのを覚えています。シラミを除去したのです。シラミがいっぱい体についていたのです。そのときに裏の山で大きな次郎柿がなっていました。なぜかはわかりませんが、娘心に日本中どこにいても柿があるというのが印象的だったようです。韓国では街中に住んでいましたからね。

韓国では親戚がほとんどいませんでしたから、日本に帰ってきて、親戚の子とはすぐに仲良くなりました。祖母が「やっぱり血のつながったものなのう」と言ったのも記憶に残っています。

最終的には父母のふるさとの吉田に着きました。父の兄が大八車を引っ張って迎えに来てくれ、「これからは荷物を背負わないでいい」と言われたのがとてもうれしかったです。それで祖母の本家の一部屋でお世話になることになりました。四畳半一間、そこに8人が寝起きしていました。隠居所でしたがお勝手などちゃんと独立して生活ができるようになっていました。冬はあんなに足をつっ込んで、みんなが放射線状になって寝ていました。

父は京城にいるときから呆然状態でした。すべてを失ってしまったのですから無理ありません。でも、先ほどお話したように、米だけは買っておいだ田畑で収穫がありました。しかし、牛を持っていません。肩身が狭いというか、牛を借りたら、何日分の労働力で返さなければならぬのです。田植えは共同作業です。そのなかで牛を持っていないということではかにされる。だんだん、厄介者を抱え込んだということで祖母の立場が苦しくなる。気の毒だということで、姉は大津の東洋レーヨンに職を見つけて出ていきました。

私は広島女専への転校試験を受けて合格をしていました。しかし、親から「男の子が3人いるから、悪いけど女のあなたは進学をあきらめてくれ」と言われました。母は泣いて頼むのです。「それならどうして転校試験を受けさせたのだ」と思ったものです。一週間ぐらい泣きあかして、そして進学をあきらめました。

長男は学費のいらない師範学校に行き、卒業してから東京の江戸川区の学校の先生になりました。そのまま田舎にいても将来性がないですから、それを機に田畑を売ってみんなで東京に出てきました。それで家族全員で働き、下の弟は奨学金をもらって何とか家計が安定してきました。父母は子ども相手のお菓子屋を営みながら、つぼ焼き芋を売ったりして生活を支えていました。貧しいなかでも借金などはなく、質屋にもいかなかった。進学をあきらめた私は、健康保険組合で経理の仕事をしていました。みんな、とにかく必死に働きました。

今、私が一番感じるのは、教育の恐ろしさということです。私たちも言われるままに政府のいうことを信じていた。みんな、何の疑問もなく戦争の勝利を信じていた。良い面でも悪い面でも教育の力はすごいものがあります。総理大臣にはしっかりしてもらいたいですね(笑)。若い人には大所高所から世の中を見るような目を養ってほしい。そして、判断力のある人間になってほしいと思います。

私も娘たちを判断力のある人間になってもらいたいと思って育ててきました。私の子育ての基本でしたね。善悪、右にいくか、左にいくか、自分がどのような行動をしたらよいかというときに、判断する力を持ってもらいたいと思っていました。そのために学校にも行ってほしいし、経験も積んでほしい。私も子どもに的確なアドバイスができるような親になりたいといつも思っていました。成績がどうかとかいうことよりも、正しい判断ができるということの方がはるかに重要です。ひたすらそれを願っていました。

今の日本の教育は少し甘すぎるのではないのでしょうか。会津藩の「什(じゅう)の掟」に「ならぬことはならぬものです」という教えがありますが、駄目なものは駄目という教育が必要だと思います。若い人には「希望」を持ってほしい。私たちは何もなかったけれど無我夢中で働いてきた。そしていつもネガティブにならず、将来に夢を持って生きてきました。戦後のものすごいインフレのなかでも、とにかく希望を持ち続けてきた。おカネよりもモノの時代でした。だから今でもモノを捨てられない(笑)。給料がいくら上がっても追いつかない。おカネよりもお米のほうがありがたかった。そんな時代があったのです。でも、将来が明るかったですね。

今は豊かになりすぎたのかもしれませんが。一方で希望がなくなってきた。私が戦後、一番欲しかった物がミシンでした。それを得たときの喜びは忘れられません。今は満ち足りていてそのような喜びがなくなっているのかもしれませんがね。まあ、急に貧乏になれといっても難しいですけどね。

東日本大震災のとき、日本中の人たちが何とか自分も役に立ちたいと思ったでしょう。あの一瞬の気持ちを忘れないことです。モノは豊かになっても、心の豊かさはまだまだです。これからは心の豊かさに将来の明るさを求めていくべきだろうと思いますね。戦後、引揚者たちは一瞬にしてすべてを失いました。神戸の震災も、昨年の震災も多くの人があつという間に多くのものをなくしてしまいました。でも、何が起っても身につけた腕や知識はなくなりません。ですから、若い人にはしっかりそのような生き延びるための力をつけておいて欲しいですね。

宮崎一幸さん

経済ジャーナリスト、インテリジェンス・ユー代表

東洋経済新報社に長く勤められた宮崎さんに、今回は母上の手記を提供していただき、また貴重なお話も伺わせていただきました。

私の父は島原の農家の出身でした。当時は5男坊、6男坊には相続する畑もなく、結局満州に行ったのだと思います。満州といっても近いのですからね。東京に行くよりも、もっと簡単に行けました。父は、満州の学校で土木工学を学んだようでした。母は親戚の関係で満州に行き、父とは満州での見合い結婚だったようです。

私は昭和16年(1941年)2月に哈爾濱(ハルピン)で生まれ、5歳まで暮らしました。父は黒竜江の大きな仕事にかかわり、その支部長になっていました。当時は家と役所が一緒のようなもので、土地も3000坪ぐらいありました。

7月になると、もう秋の訪れで庭中にコスモスが咲く。そこに馬車で冬のオンドル用の材木を一日中運び込んでいた。そこで姉と砂遊びをしていたことを覚えています。満州人の使用人やロシア人のコックさんまでいました。

もうひとつ覚えているのは、のべつ宴会をしていたこと。料理屋などそんなにはないですからね。うちには50人前ぐらいのお膳がありました。関東軍の人は宴会をするところがないので、うちに来ていたような感じでした。軍人さんは甘いものなどたくさん持っていた。ですから羊羹をくれたり、あめをくれたり、当時は珍しかったチョコレートをもったりしました。よく覚えていますよ。芸者さんもしょっちゅう家に来て、どんちゃん騒ぎをしていました。



宮崎一幸さんの母上、宮崎静江さんの手記より(以下、囲みはすべて)

北満の果て、国境の町、黒河(コッカ、現在・中国黒龍江省愛輝、アイホイ)。私達一家はこの静かな町に、二年余り住みついた。広大な黒竜江の対岸はロシアのブラゴエ(ブラゴベシチエンスク)で、時折小さな人影がみえる。ロシア牽制のためか黒河のネオンはいつも灯っている。七月末には一家揃って黒竜江の花火見物と酒落こんだ。昭和二十年八月十二日、冬物の整理もすんで、やれやれと一息ついて庭に目をやると東菊が咲き始めていた。掃除も念を入れて、明日あたり長崎のおばあちゃんを奉天まで見送りに行った夫も帰って来ると思い、部屋に東菊を活けておいた。「組長さん、集合してください。」との声に表に出る。

ロシアとの戦いが始まったので、屋までに冬物衣料と食料を持って学校に集合との事。さあ大変だ。持てる物だけでも何とかまとめ、夫が帰ってきてもすぐ送れるようにと、汗だくで片付ける。ご飯を炊かなくては、と思いながら外を見るともうぞろぞろと皆道を歩いて行く。「急がなくては」、と朝のご飯を握り、寒いときの用心に毛糸ものをいっぱい詰めて、一幸にも幸子にも持たせる。大切なものは一つにまとめ、着られるだけ(五・六枚)服を着込んで洋を背に二人の手を引いて、家の戸締りをしっかりして学校へ急いだ。

のどかで豊かな生活が、突然、一転しました。終戦になる前にソビエト軍が攻め込んで来たのです。攻めてくる前の晩、「どうもおかしい」というわきが立ちました。「逃げなければいけない」と話している前日、関東軍の人たちは「転勤になりました」と言ってみんな先に逃げてしまった。関東軍が使ってしまったので列車も自動車もないので、持っている荷物を馬車に乗せ、私たちも逃げ始めたのです。守ってくれるべき関東軍はいないのにソビエト軍は攻めてくる。仕方がないので父たちは民間人だけで手元の銃を集めて、山にこもったのです。母の言葉によれば「死に行くのだと思うより、まるで出張を送り出すような気分でサヨナラをした」と言っていました。

山にこもった父たちは、夜が明けたら周りをソビエトのタンクに取り囲まれていた。タンクと戦く方法など誰も知らない。一発も打たずに降伏したそうです。それでシベリアに連れて行かれてしまった。関東軍で逃げ遅れて捕まった人たちと一緒にされてしまったのです。国際法上は捕虜を労働には使ってはいけないのですが、関東軍司令部はそれを認めてしまった。数十万人です。シベリアは何もない。攻めてくるソビエト兵も多くは囚人兵でした。父などは土木技師でしたから、本来はシベリアで長期間働かせられる可能性が十分あった。しかし、みんな、それを黙ってしてくれたので3年ぐらいで帰してもらえたそうです。

でも、その間が大変だった。隣で寝ている人が死ぬのがわかる。亡くなる前の晩にシラミが一斉にいなくなるのだそうです。体温が下がるのです。食べ物といっても黒パン一個ぐらいです。栄養失調になってポーッとしている。元気な人は弱っている人のパンを取ってしまう。取られた人は自分が食べたと思ってしまう。それぐらい意識がもうろうとしている。そして、そういう人は死んでいく。全体の3割ぐらいが亡くなられたと聞きました。零下40度か50度の土地ですからね。だから本当に便所のなかに落ちていたジャガイモの切れ端でも何でも食べたと言っていました。

モンゴル方面とシベリア方面の両方から攻められていた。開拓農民の方がたくさんいて、それは本当に悲劇でしたね。開拓農民の方は子どもが多い。「産めよ、増やせよ」で、子どもは労働力ですからね。

石の轍の馬車でゴトゴトと大草原を逃げました。秋ですから見渡す限り桔梗が咲いていました。そこに飛行機が来て銃撃をする。その間は草の中にもぐって隠れる。私は子どもで小さかったので、桔梗が人間の背の高さぐらいに感じられた。轍が桔梗の紫色に染まっていた。敵機が去るとまた馬車で移動する。ずっと後年まで桔梗の夢を見ましたね。そのあと無蓋貨車に乗って逃げました。そうすると敵は銃撃に来るんですね。私の前にいたお母さんが赤ちゃんを抱いておっぱいをあげていた。その人が銃撃でやられて血が私にバサツとかけた。すごかったですね。これもいつまでも夢に見ました。

「水が欲しい」と子ども達にせがまれても一滴の水も無い。まわらぬ口で洋がブーブーするので唾でも飲ませてやろうとするが、いくら努力しても口の中はカラカラで喉が引きつるだけ。隣の人の水筒にはまだ水が入っているだろうか？こんな時には「下さい」とも言えない、人の事より自分が大切なものだ。男の人がいてくれたらなあと思う。子どもが泣き、その体に巻き付けておいた着物も邪魔になり一枚一枚脱ぎ捨てた。腕に付けていた時計も取ってしまう。

何だか頭がぼーとしてきた。思ってもいない事が口から出る。それがおかしくて笑う。他人が見たらまるで気遣いだ。私の血筋には気遣いの人はいない、などと考えるくらいだから気がおかしくなっていないと思うのだが。なんだか頭のゼンマイが切れてしまったようだ。こんな事が二日も続いたら本当に気が狂ってしまうかもしれない。

「さあ、降りるんだ」という声にハツとして目を開いた。どうしたことか何も見えない。真っ暗だ。「奥さん！私の肩につかまりなさい」と誰かに声を掛けられて、ようやく汽車から降りた。まるで高い船の上から飛び降りたような感覚だった。皆夜の線路上にへなへたと崩れ落ちる。もう歩けない。何しろ水が欲しい。まわりをキョロキョロしていると、これが本当に天の助けというのだろう。雨が降ってきた。大きな口を空に向けて、思い切り雨水を飲む。ようやく元の私に戻れた思いがした。喉が潤うと、皆起き上がって駅に向かった。まだ目元が少し引きつっている。

要するに、玉音放送も何もない。もう敗けたのはわかっていた。父は自分たちを守るために山にこもったままいなくなってしまった。シベリアに連れて行かれたのですが、そんなことは残った家族にはわからない。死んだものか、あるいはシベリアか、そんなことはわからない。残された大人は女と年寄りばかりです。とにかく哈爾濱まで戻るのは大変だったのです。

やっと汽車に乗れたが、子ども達は網棚に乗せ、四人掛けの椅子に六人座り、間には二人が立ってどうにも身動きが取れない。汽車の中で隣の赤ちゃんが死んでいった。奥さんが大声で泣きわめく。同情しなければならぬと思いつつ、無性に腹が立った。悲しいのは彼女だけではない、と口まででかかったが、ぐっと押さえた。家の洋も明日か明後日の命。洋はハシカにかかっていた。私はその時が来てあんな様はしたくない、と心に言い聞かせた。

吟爾濱に早く着かないかと待っていたが、夜がきて空が明るくなってもまだ到着しなかった。死んでしまった赤ちゃんをおぶっていた人も、川の上から赤ちゃんを捨てた。ドボン、ドボンといくつもの音がする。捨てる人の顔も死人と同じ色だ。

哈爾濱に戻りましたが、元の日本人街を満州人が襲って来る。彼らは貧乏ですからね。それで何から何まで持って行ってしまふ。身ぐるみはがれます。量から何からすべて持って行ってしまふのです。電気も来ていないのに電球まで持って行った。私は木でできたタンクのおもちゃを持っていたのですが、それを取られそうになってギャーギャー泣きました。そのせいか、そのおもちゃだけは取られずにすんだのを覚えています。

ソビエト兵がマンドリンの形をした拳銃を撃って中国人を追い払う。そのソビエト兵の腕を見ると、いくつもズラッと巻き上げた腕時計をしている。しかもその時計の時間がみんな違う。彼らは時計が読めないのです。母は女性だとわかると危ないので、頭を丸坊主にして顔に墨を塗っていました。満州人の服を着て男のような格好をしていました。

いよいよ八月十五日。天皇のラジオ放送を聞く。泣く人もいたが、私は泣けなかった。負けるという事はうすうす感じていた。負けたのだ。仕様が無い。泣く気力も無いのかもしれない。明日がどうなる事か、考えも付かない。

玉子でも茹でて食べようかと勝手口から外をのぞくと、幾十人も満州人がワイワイ言いながら品物を持ち出している。何が始まったのだろうかと思っている間に、こちらにもやって来る。ワーワーと叫びながら箆、戸棚、雨戸までありとあらゆる物が、大水に流されたように無くなった。恐ろしくて押入れに入り中から戸をしっかりと握っていた。青龍刀を持った者、鎌を振り上げる者、黒く脂ぎっていて、映画に出てくるそのままの顔をしてわめいている。今までの怨みを晴らそうと何から何まで片端から持って行ってしまふ。暴動とはこういうものなのだろう。何も無くなってしまった。

ついには私達も引っぱり出される。Mさんが裸にされ、女はシミーズ一枚にされる。一幸にも手が伸びた。外を見るとロシアの兵隊が銃を構えて立っていた。「助けて」と大声をあげてロシア兵の後ろに隠れた。訳の分からぬ大声に満人たちはビクビクして、蜘蛛の子を散らすように逃げていった。その隙に私達も逃げた。

中国の、特に北満の人は文盲が多かったのです。日本人はほとんどが字を読める。彼らは、明らかに日本人は自分たちとは資質が違うと思ったのでしょう。それで、日本人の子どもをくれて言うてくる。しかし、男は仇討などする恐れがある。女の子は頭がよく、労働力になり言うことを聞く。小学校1年ぐらいの子がずいぶん中国人にもらわれていきました。それが中国残留孤児になったわけです。よく子どもを捨ててきたというような言いかたをされますが、実は、そのままいけばみんな死ぬと思っていた。そこに中国人が来てまんじゅう20個で子どもをくれという。中国人にあげた子どもは確実に生き延びられる。そして、まんじゅう20個で残った子どもたちが飢えずにすむ。だから名札を着物に縫い付けたりして中国人に子どもをあげた。だからこそ、戦後、「実は私が親です」と言って手を挙げづらくなってしまったのです。本当に壮絶ですよ。

二～三百人の満州人がやって来て私達を一箇所に集め、ぐるりと周りを取り囲み、持っている物を出せと脅迫する。娘をくれと、手を引っ張る。取られたら大変！向こうとこっちで互いに手を引っ張り合う。娘が大声で泣き叫ぶ。泣いたので助かった。まったく日本人もこうなると哀れなものだ。

一人去り、二人去りして、夕方になってようやく家に入れた。中支那北安は昔、共産匪が農民になった所なので何をかわからない。支部の会議室に女子どもを真ん中に、男の人達が周りを囲む。「ピストルが五丁有るので、いざという時は覚悟してください」と言われる。「私もお願いします」と頼んだ。

終戦二日後の8月17日、北安の学校に收容されました。ひとつの教室に60～70人が詰め込まれ、頭と足を互い違いにして寝る状態でした。夜中にトイレに行くと、もう入る場所がない。夜もロシアの兵隊が女を探しにきます。明るくなると今度は時計をあさりに来る。3000人の共同生活でした。学校の校庭では、満人が昨日、略奪したものを市に出して売っている。

八月の暑さに身動きが出来ない生活で毎日病人が出る。はしかがはやり始め、2～3歳の子どもが櫛の歯が欠けるようにバタバタと死んでいく。病院の先生はいても薬は無い。長い二ヶ月だった。

何しろ便所に行くにも男の人の監視がないと安心して行けない。長い穴の上にコモがまいてあるだけの便所に二十人もの人が前の人のお尻を見ながら用を足す。一部が済むと「ハイ」と監視の手が拳がり、後の人がサッと跳んでくる。連れて行かれては大変なので、兵隊が来る前に用を足さなくてはならない。女の人は顔をわざと黒い泥を塗り付けて、お互いに見られた様ではない。それでも、黒いクーリーの服を着、真っ黒い顔をしていてもやはり自分は女だと思っているらしい。

小便の臭いなどで息が切れそうな汽車に詰め込まれ、哈爾濱を通り、2年前まで住んでいた新京にたどり着きました。平和な毎日を過ごした新京は、どこも暴動にやられ荒れ果てていました。そこで弟が亡くなりました。

家がロシア人に乱入されたので抱いて逃げているうちに、気が付くと洋が冷たくなっていた。この子は手が掛からない子で、2時間でも遊んでいた。こんな事になるのなら、昨年哈爾濱まで行って痛い思いをするトラフオームの手術などしてやるのではなかった。かわいそうに思う一方、親孝行の為に死んでくれたのかとも思った。小さい子ども3人を連れていた私はさすがに疲れていたからだ。近所の坊さん呼び、児玉公園の生前仲のよかったMさんの子どものお墓の隣に埋めた。辺りは日本人の墓標でビッチリ、何千人埋めてあることか。

翌日、花を持ってお墓参りに行って驚いた。「犬と日本人、入るべからず！」と大書してあり、すっかりローラーで地ならししてあった。戦に負けた者の悔しさが胸に込み上げてくる。可愛そうな洋、きりも無く湧き出る涙をどうすることも出来なかった。



とにかく葫蘆島(コロトウ)の收容所までたどり着き、そこから博多まで逃げてきました。私は哈爾濱に戻ったところから本当に何も覚えていないのです。記憶がなぜか欠落している。次に記憶に残っているのが引揚船でした。上陸前に赤痢が発生して20日間、船に足止めを食わされました。いよいよ明日、上陸というので最後のお米を炊こうと置いておいた。そうしたらそれを盗まれてしまった。そんなこともありました。

上陸すると頭からDDTを浴びせかけられた。そして、自分の顔ぐらいあるお赤飯のおにぎりがもらえた。母は子どもが食べ残すのを期待していたのですが、みんな食べてしまった。

島原の父の実家に2～3カ月いて、その後、母の姉のいた千葉の大原、房総半島の先っぽですね、そこに転がり込んだのです。私もそこで小学校1年に入りました。大原は米も取れる。地味がそれほどよくないけれど野菜もできる。そして、魚は豊富です。ですから、ひもじい思いはなかったですね。その子どもたちはみんな太っているのに、こっちはガリガリ。よくいじめられましたよ。母は私たちをそこに預けて豊橋に就職していました。縫い物の仕事でした。その後、父がムーンフェースの真ん丸な顔になって帰ってきました。それであまり父には向いているとは思えない食料品屋を大宮で始めました。頑固な商売をしていましたね(笑)。貧乏でしたが食べ物には苦勞しませんでした。

まあ、極限状態を体験したことで「どうせ一回は死んでるわ」という気持ちはありますね。それとね、ドリス・デイが歌っていた「ケ・セラ・セラ」の気持ちですね。あ、それから、1929年のミュージカル、「回転木馬」のなかに「You never walk alone(君は決して一人で歩かない)」という歌があります。エルビス・プレスリーも歌っています。

嵐の中を歩くときもあなたは一人ではない
嵐の向こうには輝く大空がありひばりの歌声が聞こえる
だから顎を引き締めて真正面から向かって行け

というような歌です。酔っぱらうとよく歌いながら家に帰ります。この歌の歌詞も好きですね。

若い人へのメッセージ？ そう、今の人はあきらめるのが早いですね。人間、極限状態になると「できない」と思っていたことが「できる」方にスイッチが入ります。卑近な例でいえば、いくら練習してもできなかった鉄棒の逆上がり必死に練習しているとできるようになり、あとはずっとできるようになる。もうだめだと思ったところでようやく能力のスイッチが入る。ですから、あきらめるのが早いといつまでたっても本来の力がでてこない。

ちょっと優秀な子には、「お前ら、そんなにエリートじゃないよ」と言いたいですね。世界のエリートはもっとすごい。格差社会というのは自分たちが作っているのです。偏差値が低いとそれだけで自分をダメだと思ってしまう。あきらめてしまう。逆に偏差値が高いからといって、そのことだけで優秀だともいえない。勝手に自分たちがそう思って、自分たちで格差を作っている。その格差によって自分の成果が裏切られると思うとガクッとくるんですね。格差を作るのに加担するなと言いたいですね。

後記にかえて対談: 島田知保さんx岡本和久

岡本 | 8月は終戦記念日です。戦中・戦後を生きぬいた方々も数が減っています。極限的な状況を体験した方々の体験は、ある意味われわれの持っている貴重な資産です。その体験が風化しないように、消えてなくならないように文章の形にしておくことも意義があると思い、2回に分けて特集を組むことにしました。もちろん、とてもありがたいことなのですが、われわれはあまりに長く平和で安楽な生活が続いてきたために、それを普通だと思ってしまうようになってしまった。そして、「苦しい」とか、「大変だ」という基準がすごく低くなってしまい、ちょっとしたことで「もうダメだ」と思うようになってしまった。そんな気がするんですが。

「国」と「国防」を考える

島田 | 確かにそんな気はしますね。

岡本 | 私は1946年、終戦の翌年に生まれました。先月号で紹介した父の手記にもあったように、私の生家の台所の床には大きく焼け焦げた跡があったのを覚えています。また、家に砲弾や鉄兜があり、近所の東京工業大学には防空壕がたくさん残っていました。庭に掘った防空壕は小さな池になっていました。もちろん貧しかったし、粗末な服で学校に通い、決しておいしいとはいえない脱脂粉乳とコッペパンの給食で育ちました。しかし、まあ、そこを原点としてみればずっと平和が続いて経済が発展し、成熟し、それなりに豊かな国ができました。

しかし、一方で国防面での安全などは極めて意識が薄くなってしまっている。みんな、生活の安全・安心にはとても敏感なのにね。国防はアメリカ任せのようになってしまった。一方のアメリカは戦後もずっとどこかで紛争に巻き込まれている。60年代の中ごろ、私がアメリカの大学に行ったころは本当にベトナム戦争が激化しつつあるときでした。しかも、国民皆兵制です。ルームメイトが18歳の誕生日に徴兵局に登録に行ったのをよく覚えています。成績の悪い順にベトナムに飛ばされるといううわさがまことしやかに流れていました。徴兵制はなくなっても、アメリカはずっと戦争と隣り合わせの暮らしをしていたんです。しかし、日本にはこれが完全に抜け落ちている気がします。決して、戦争がよいと言っているわけではないですが、緊張感というか、危機感は絶対に必要です。

島田 | 国防に対する考え方はいろいろあると思います。でも、われわれの生活は決して戦争とかかわりがないのではなかった。ずっと米軍基地はあったわけですね。私の大学は外国人も多かったし、そのなかには基地の人たちもたくさんいました。でも、正直言うとやはり彼らが持ち込む習慣というか、行動は受け入れられないものも多かった。ドラッグとか、人身売買とかですね。韓国は徴兵制がありますが、やはり、家族や友達と隔離されて人間性を捨てる訓練を受けるというのは人道的にもよくないと思います。

- 岡本 | 確かに戦争することは決してよいことではありません。でも、われわれ、自立が大切といっている最後の最後にはやはり国の保護の下に入っている。日本国のパスポートがあるから世界中、ほとんどの国に自由に行けるのです。もし、パスポートがなく海外に放り出されれば、その人がどうなっても誰も守ってくれない。その一番基本的な生存を確保する部分で、国というのはまだ現在の世界では重要なのです。ですから、国というものが消滅するという事の恐ろしさをわれわれは忘れていると思うんです。玉音放送のあと、「もう、日本はなくなったのよ」とお母さんが子どもたちに告げる上田卓さんのお話がありましたが、これは本当に胸にグサッと突き刺さる言葉でしたね。
- 島田 | 国の存在はものすごく大きな保障ですよ。今は、国が守ってくれていることが当たり前のようになっている。もともと国境は人間が引いた境界で、時代によって変化するもの。どんな国もいつかは消えてなくなる。戦争で国を守るにしろ、非暴力で国を守るにしろ、相当の覚悟が必要です。スポーツのときとか、不満のはけ口としては、国が意識にのぼってくるけれど、国を守るために自分がどうするかということはほとんどの人は考えていない。
- 岡本 | 国が守ってくれるのが当然と思うのと同じように、平和も当然という前提でわれわれの生活が成り立っています。本当は平和ではなくても、平和を直視しない状態といったほうがいいかもしれませんけれどね。
- 島田 | 自分たちで自分たちの国を守るという、意志のある国とない国では社会の組み立てからがかなり違ってくるように思います。国を守るという意志を浸透させる際に、ボトムアップか、トップダウンかという違いがあると思いますが、私は今の日本では、やはり国民一人ずつの意識を高めるボトムアップ方式の方がいいのではないかと考えています。個人がしっかりしてくることで国という器もしっかりしてくるのかなと思うんです。
- 今回、記事を読んでいて、実は現在の状態は戦後と似た部分があるのではないかなと感じました。東日本大震災後の日本と戦後の日本。戦後の日本には焼け野原から立ち上がろうという、ある意味希望があった。でも今は、みんなちょっと疑心暗鬼になっている。国も方向性を示せないでいる。そのようななかでみんながつながってきているという面もあると思うんですよ。

「戦後」と「3.11後」の違い

- 岡本 | 3.11と戦後の違いで一番大きいのは、戦後のときは今後の方向性を示してくれる、というか押し付けてくれる存在があったということでしょう。アメリカというね。「これからはこういう風にやらなければいけないだよ」と針路を教えてください。功罪ともにあるとは思いますが道筋をつけられた。3.11ではそれが無い。
- 島田 | ビジョンが見えない。本当はわれわれ個人がビジョンを示さなければいけないんですけどね。誰かがグランド・デザインを描いてくれるのを、口を開けて待っている。
- 岡本 | なぜ、そうなっているかというやはり戦後のグランド・デザインも人に描いてもらったものだからでしょう。与えられることに国民が慣れてしまっている。
- 島田 | かなりいろいろとキーワードは出てきています。持続可能な社会とか、地球規模での共存とか。それらのキーワードが経済や国家、あるいはわれわれの腑抜けた楽観主義のなかでうまくかみ合っていないことがあります。
- 岡本 | 「そんなのきれいごとだよ」とか「現実の社会ではそんなのうまくいかない」という既成観念で打ち消されてしまう。国家レベルでも、企業レベルでも、個人レベルでもキーワードが単なる概念で終わってしまっている。エクセキューションがないんですよ。政府が悪いのかといえばそれまでですが、でも、その政府を選んでいるのは国民ですからね。
- 島田 | 何かあるとみんな政局になってしまう。虚しいですよ。
- 岡本 | 希望が持てるのは、東北の悲惨な状態のなかから戦後を生きぬいたような力を持った強い人たちが出てくることだろうと思います。将来の日本のリーダーとなる人が、今回被災された若い方からたくさん出てくるでしょう。それを期待したいですね。

島田 | 戦中・戦後の厳しい状態のなか、歯を食いしばって生きてきた人たちがいて、その結果私たちが今こういう暮らしができています。安心な暮らしを謳歌するばかりでこのときに何もしなければ、前の世代の遺産を食いつぶすだけです。少し長い歴史感を持って自分たちの今を見てみると、これからの生き方や経済の見方なども変わってくるかもしれない。若い人にはぜひ、それをやって欲しいですね。

岡本 | 難しいのは、苦難が強い人間を生み出すとしても、今のこの豊かな日本が現実にあるわけで、急に「貧乏になれ」と言われても無理な話です。それではどうしたらいいのか、それが今回いろいろな方を取材して常に頭から離れなかった疑問でした。それで思うのですが、今、円高が進んでいるのは、ある意味日本の産業のグローバル化の遅れが引き起こしている面があります。もっと多くの企業が海外生産を増やし、生産拠点を新興国や発展途上国に移せば円高は止まるでしょう。でも、当然の結果として国内に雇用機会が減り、仕事を求めて遅れた国に出ていく人も増えます。その人たちは戦後の日本ほどではないでしょうが、やはり、貧しい生活がどんなものか、そのなかでどうしたら生き延びていけるのかということを読んでいくでしょう。これもひとつ経済の神様が与えてくれている試練なのかな、などとも思います。

「過保護」が「生き延びる力」を奪う

島田 | 80年代、90年代にはまだ若い人たちがそういうところに行こうとしていたんですね。その非日常的な生活がひとつのエンターテインメントだったということはあっても、彼らが今、NGOやNPOで活躍しているという事実もあります。わざわざ外国なんか行きたくないということを知ると、ちょっと大丈夫かなと心配になりますよね。

岡本 | 私は70年代の初めにブラジルのサンパウロで勤務したことがあります。当時のブラジルは今と違ってまさに発展途上国でした。バスに乗ればノミ・シラミがつく。町にはスリ・かっぱらいがいつも狙っている。私が駐在した2年間、わが家には電話がありませんでした。ブラジルの高層ビル35階にオフィスがありましたが、そのビルが火事になったことがあります。屋上に避難して消火を待ったのですが、あとで考えると危なかった。ちょうど、「タワーリング・インフェルノ」という映画が上映されているところでした。まあ、かなりの低開発国での生活でしたが、ブラジルで生活した経験は本当に人生で役にたっています。

島田 | 私も80年代、バックパックで世界のさまざまな場所に行ったのは貴重な経験でした。モノがなくても人間は生活ができるとか、日本が安全の代償で何を失っているとか、いろいろな発見がありました。安全ではないところでも人間は生きているんですよ。

岡本 | そう、安全じゃないから生き延びる力が出てくる。

島田 | 日本はあまりに過保護ですよ。電車降りるときに忘れ物の心配までしてくれる(笑)。

岡本 | ホームでは電車が来るので黄色い線の内側に下がれとか……(笑)。

島田 | アメリカのグランドキャニオンでは、一目見て落ちれば死ぬとわかるところには柵がない。そういう意味では二重、三重に安全網をめぐるしてくれることで自分の頭を使わない、自分の危機に対する感覚を使わないということになっている。

岡本 | 動物的な生命力というか、サバイバル力がひ弱になっていますよね。

島田 | もう一つは教育の問題です。学芸会で主人公のお姫様が5人も6人もいるというおかしな現象がありますね。徒競走で全員が一着とか。本当は社会のなかで自分の能力を相対化して考えることを止めてしまっているのです。みんな気位は高いけれど謙虚さが無い。

岡本 | 規格大量生産は工業製品だけでなく、子どももそうです。ですから、ちょっと人と違うと、欠陥品としていじめの対象になる。昔、足の遅い子は「くやしかったら勉強でこい」などうそぶいていた。そんなしぶとさが欲しい。

- 島田 | ファッション雑誌で同じものを売りつけようとしているのに、キャッチフレーズが「わたし流」だったり「自分流」だったりする。これ自己矛盾ですよ。ある意味、消費文化に絡め捕られた箱庭のような文化になっている。だから、30~40代になって突然、仕事を辞めて「自分探しの旅」に出たりする。「自分」は仕事をするなかで探していくものです。
- 岡本 | 本当にそうです。どこかの場所に「自分」が落ちているのではない。自分のなかにしか自分はいないんだから。角界に「欲しいものは全部、土俵に埋まっている」という言葉があるそうですが、欲しいもの、自分も全部、仕事という土俵に埋まっている。必死にそれを掘り出せばいいんです。
- 島田 | もうひとつ顕著なのが資格収集ですね。いろんな資格を取って安心したり、成功した人の書いた本を読んでそれを真似ようとしてたり……。
- 岡本 | 3時間でわかるナントカみたいな(笑)。
- 島田 | そんなことで成功できるならみんな成功していますよ。解答がないのが人生です。でも、何かを習おう、教えてもらおうとする。
- 岡本 | 学ぶのはよいことだけど、近道、早道、楽な道を教えてもらいたがる。長期投資でのんびりやっていたらいいのに、みんなすぐに儲かる短期投資の方法を知りたがる。何かうまい方法があるはずだと思っている。
- 島田 | あるいは貯金しているから大丈夫という人や、将来の生活を考えるのが不安だから考えないという人もいる。でも、比較的豊かだとか、日本が安全だとかいう状態はあまり長くは続かないかもしれない。もっと切迫感を持ったほうがいいと思いますね。

「安全」の意味とは

- 岡本 | だからね、震災や原発の例でもわかりますが、何が起こるかわからない。もしかしたら隣の国が突然日本を攻めてくるかもしれない。たぶん、起こらないだろうけれど、絶対にないとはいえない事象に対して、もちろん国としての対策は必要ですが、同時に個人のレベルでも「万一」の場合にどうするかということは少しだけでも考えておく必要がある。それを国が何とかしてくれるだろうと丸投げするのは間違いですよ。「座して死を待つのは嫌だ」と思うなら「いざ」というときの備えを自分で考えておくことです。それが選挙での投票行動で表現されたり、自分年金づくりになったり、あるいは海外に口座を持って資産の安全を図るというようなことになるのではないのでしょうか。
- 島田 | アジアの人って金(きん)を身に着けているじゃないですか。何かのときに着の身着のままでも金だけは残る。そういう緊張感が日本にはあまりないですね。
- 岡本 | オスプレーの配備が問題になっています。私はオスプレーが最適な機種かどうか、それが本当に戦略的に必要なかはわかりませんが、少なくともアメリカは「安全」のために配備を考えている。日本の反対派は「安全」の面でNOと言っている。同じ「安全」でも全然意味が違う。
- 島田 | そうですよ。もし、NOならそれに対してどのような対案があるかという点が抜けている。東日本大震災のような悲劇も、日本では結構風化が早い。原爆を広島と長崎に落とされたのに、すぐに「アメリカ大好き」になってしまう。最近の若い子は原爆を落とされたといっても「間違っって落としてしまった」ぐらいにしか理解していない。だいたい、日本とアメリカが戦争していたことだって知らない。
- 岡本 | つい、60数年前のことが遠い歴史上の事件になってしまっている。保元の乱や応仁の乱とはいわないけれど、少なくとも、日清・日露・第一次対戦と並列になってしまっている。それとともにその極限状態における体験も失われつつある。極限状態で得た生き延びる力も伝わらなくなっている。それは日本としては本当にもったいない。それゆえ、この企画には意義があると思ったのです。
- 島田 | のんびりとしていても、いつ、戦争が起こるかなんてわからない。特に今のような経済環境ですとね。私は、よく「今の日本はワイマールだ」と言っているんです。他力本願のまましていると、忘れたころに災難がやって来る。声の大きい先導者が出てきてみんながあおられる。方向を示してくれてみんながその方向に向かって走り出す。

岡本

今回の聞き取り取材で感じたことをまとめておきましょう。一つは戦中・戦後の極限状態は決して過去のものではなく、これからだっていつ起こっても不思議ではないということです。東日本大震災はそれを思い出させてくれました。この点はとにかく忘れないでほしい。そして、そのようなときにでも耐えられるように平和ななかでも「生き延びる力」を養っておいて欲しい。極限状態を体験するのは難しくても、たとえば必死に仕事をする、発展途上国で何年か仕事をしてみるというのもいいと思います。また、真摯に東北の復興活動に参加してみる。少なくとも極限状態の疑似体験をしてみるとことは意義があると思います。

そして、最後に「いざ」というときに生き延びられるように心構えを持つこと。もちろん、個人として、自分を守るための手段を講じることは当然です。しかし、それには限界がある。やはり、国というものの存在は大きいのです。ですから、個人、生活者として少しでも国や企業がよくなるような働きかけを続けていくことが非常に重要なのではないかと感じます。多くの方が戦中・戦後の体験をあまりお話になりたがりません。今回、取材に応じていただいた上田さんご兄妹、田中さん、鳥山さん、宮崎さんに深く感謝したいと思います。



中国がわかるシリーズ11 新という国家の位置付け

ライフネット生命保険株式会社
代表取締役会長兼 CEO 出口 治明

今から約 2000 年前、西暦元年(1 年)のGDPが試算されています。下記の通りです。

漢帝国	26. 2%
インド各国	32. 9%
パルティア	9. 7%
ローマ帝国	17. 2%
倭(日本)	1. 2%

これを見ると、西暦元年(以下、年号は西暦)の世界は四大国(漢、インド、パルティア、ローマ)の時代であったことがわかります。長安では、九歳の平帝が即位しましたが、実権は、外戚である安漢公、王莽の手中にありました。二年、世界で初めての人口調査が行われ、総人口が 5959 万 4978 人と報告されています。首都長安は、25 万人弱ですが、当時は、漢室の陵墓の周辺に七つの陵邑(守陵都市)が築かれていました(陵邑の制度も始皇帝に始まりますが、宣帝を最後として BC43 年、新たな陵邑の建設は廃止されました)。高祖の長陵が 18 万人弱、武帝の茂陵(司馬遷も移り住んだのです)が 28 万人弱と記録されていますので、これらの衛星都市を含めた大長安の総人口は軽く 100 万人を越えていたものと推察されます。間違いなく、世界一の大都市であったでしょう。

インドでは、北部でも南部でも分裂状態が続いていましたが、漢とパルティア、ローマを繋ぐ貿易のおかげで、経済は順調に推移していました。ちょうど、サーンチーの第一塔が完成し、ヒンドゥー教に刺激されて、大乘仏教が興ろうとしていた頃です。パルティアとローマ帝国の間には、平和が保たれ、ローマでは、紀元前二年に国父の称号を得た初代皇帝アウグストゥスの下で、穏やかな時間が流れていました。ローマ市の人口も、100 万人前後はあったとする説もあります。ローマ帝国の東方、パレスティナのナザレでは、イエスと呼ばれる幼子が、四歳の春を迎えていました。日本では倭人が、百余国に分れて争い、一部は、漢の楽浪郡に朝貢していました。

八年、外戚の王莽が、ついに国を奪い、国号を「新」としました。気丈な伯母の太后、王政君は、始



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

皇帝以来の伝国の璽(皇帝の象徴)を、地面に投げつけて、王莽の忘恩を詰ったと伝えられています。王莽は、儒家思想に忠実な、復古的な政策を打ち出しましたが、地名の改称、7年に4度の貨幣改革、土地所有の制限など、あまりに現実離れしていたので国内はたちまち混乱に陥り、匈奴など周辺の民族も離反して再び勢力を盛り返したのです。

華夷秩序を強制し、匈奴に賜与した印璽を章に格下げ、また、高句麗を下句麗と改める等して他民族の離反を招いたのですが、これでは他民族が怒るのも当たり前でしょう。17年、山東で息子を軽罪で殺された呂母が、県宰を殺して仇を討ちましたが、そのかたき討ちに協力した若者達は、18年に起こった赤眉の乱に合流していったのです。味方の印に眉を赤く描いた農民反乱です。これを、きっかけに、国内各地で反乱が続出し、23年に王莽は殺され、新は15年であっけなく滅んでしまいました。

しかし、この短い王莽政権の間に、儒教の体系化が進み、文書行政が整った中国と、そうではない周辺国との関係が整理されたのです。俗にいう東アジア冊封体制の始まりです。西周が諸侯に祭祀青銅器を与えたように、中国は漢字の書かれた金印や鏡を周辺国に与え続けました。漢字を使用する帰化人等が外交を取り持ったのです。周辺国が漢字、漢語を受け入れれば、中国に同化したことになりませんが、韓半島や倭、ベトナムでは、そうはなりません。韓半島で訓読や万葉仮名の祖形が発想され、漢字を使って他の言語が記録されるようになったのです。要するに、漢語は浸透しなかったのです。

しかし、漢字を受け入れ、読めるようになった周辺国は、中国の歴史に圧倒されました。そして、周辺国がそれぞれの王を一尊とした律令に基づく文書行政を始めます。戦国時代の中国の文書行政開始から1000年以上が過ぎて、それが周辺国に及んでいったのです。かつての東周に比べれば、中国はすでに圧倒的な強国となっていました。中国と周辺国との関係は、戦国時代の東周と七雄のような微妙な関係に転化するのです。(この辺りのことについては、コラム初回「【中国がわかるシリーズ】中華思想とは何か、淵源の有力説は…」を再読してみてください)。

すなわち、周辺国に自らを中心とする中華思想が生まれたのです(京都を洛陽と雅称すること等はその典型です)。なお、韓半島や倭では、速やかに中国の国制が受け入れられましたが、ベトナム南部では、インド文明が、既に浸透していたため、中国を模した国家の成立は、韓半島や倭よりも遅れることになりました。

王莽政権は、一般には時代錯誤的な政権だったと理解されています。確かにその側面は間違いなくありましたが、武帝が儒教を国教とした論理的な帰結の一形態でもあり、また、東アジア冊封体制への影響等を考えれば、その重要性は決して無視できないものだったと思われます。多民族が入り混じった中国では、もともと異民族に対する偏見はほとんどなかったのですが、儒家思想の拡がりとともに、華夷秩序(異民族を差別した上で包摂する考え方で、単純な排除の論理ではあり



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

ません)が次第に形成されていくことになるのです。

「東アジア冊封体制」の冊封とは、冊書(辞令書)により王位や高位の官に任命(封建)することを行います。つまり、中国の皇帝が、朝貢を願い出た周辺国の君主に、その領地に係る王号や称号を与えて独立支配を公認する一方、中国の爵位(王公侯伯子男)を与えて君臣関係を結ぶという国際秩序を指します。周辺国にとっては、漢字圏の、即ち世界の最高権威から公認されたというメリットに留まらず、常に朝貢貿易による経済的な実利を伴っていたため、一般に、朝貢は大いに歓迎されました。

もともと、軍事力に秀でた匈奴や突厥、ウイグルなどの草原世界は、一貫して中国を、世界の最高権威ではなく、むしろ服属国とみなしていたため、実態的には、冊封とは無縁でした。また、草原世界以外でも、中国の史書に冊封が記されていても冊封された側にその記録がなければ、それは、必ずしも実体を伴ったものではなく、むしろ中国側の願望、儒教の公式論に近いものであったとして理解すべきでしょう。



I-OWA マンスリー・セミナーより 「なぜ、いまマネー教育なのか」

講演: 岡本 和久

よく「お金は額に汗して手にすることに意味がある、投資などによって儲けるのはけしからん」というようなことを言う人がいます。額に汗して稼ぐのは間違いないのですが、投資によってもまた、価値が創造されていくのです。それなのに投資は悪いこと、お金は汚い、そういう風潮が出来てしまっている。これまで7~8年にわたり、中学・高校で、お金や投資について話す出張授業という活動を続けていますが、その際に行うアンケート結果にも、この風潮は現れており、ほぼ一貫して「おカネは汚いもの」、「お金持ちは悪い人」というイメージを子供たちが持っています。

子供たちにお金の話をするにあたって、何か資料を用意しようということで、今回、画家のムムリクさんの協力を得て作成したのが、ピギーちゃんの紙芝居です。ピギーちゃんは、今年4月から当社で輸入販売を始めた、米国マネー・サビー・ジェネレーション社の子ぶたのマネー教育用の教材です。大いに活用して、「お金は感謝のしるし、感謝と一緒に世の中を旅している」ということを伝えて、お金に対する誤解を解いていきたいと思えます。



ピギーちゃんには、お金を入れるための「4つの口」があります。まず初めは「つかう=Spend」。今欲しいもの、たとえば一枚の板チョコを買う。そこには、原料のカカオが採れるガーナやブラジルの農園で働く人、日本のチョコレート工場で働く人、売っているコンビニの店員さん、トラックや船を動かす人など、チョコレートができるまでの全ての人たちの生活費が入っています。みんなに美味しいチョコレートを食べてもらいたいという気持ちがお金によって集められチョコレートになっているのです。

次に「ためる=Save」。ここでは、今、我慢することによって喜びが増えていくという「時間価値」について学びます。そしてお金が貯まったら銀行に口座を開く。そこで銀行の仕組みについても学んでもらうわけです。少し先に大きな買い物をするために預金をする。そのお金が、ビジネスでお金



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

が必要な人やマイホームを持ちたいという人に、銀行を通して貸し出される。金利はその時、「お金を使わせてもらってありがとう」という感謝の気持ちとして払われるのです。

「ふやす」は投資(Invest)です。ずっと将来の夢を実現するためにお金を殖やしたい。それは今すぐ必要なお金ではありません。一方で、今すぐおカネを必要としている人もいます。そういう人におカネを使わせてあげ、その人がビジネスを大きく育て、世の中の為になることをします。そして将来、大きくなった企業が「ありがとう」という気持ちを込め、収益の一部とともに投資資金を戻してくれる。これが投資の本質的なスキームです。株式というものは、そのためにあるのです。

最後は「ゆずる」=「Donate」。人が喜んでくれれば自分も嬉しいでしょう。お金はそのものに価値があるわけではなくて、モノと交換して、そのモノが喜びを与えてくれるから価値があるのです。ならばモノを介在させないで、直接喜びを得たっていいじゃないか、ということになります。人にあげると人が喜び、自分も嬉しい。それも一つのリターンです。私は、お金を超えて喜びを得るという意味で、「超マネー・リターン」とか「超マネー投資」と言っています。

講演では、紙芝居を使った「お金の話」の詳しい内容、子供たちへの様々なメッセージ、子供たちからの反応などお話いただきました。そのほか、マネー・サビー・ジェネレーション社との出会い、その理念や活動、日本フィランソロピー協会のサービス・ラーニング・プロジェクトやミュージック・セキュリティーズの被災地応援ファンドについても伺いました。更に、画家ムムリクさんのご紹介と共に、色々な作品を見せていただきました。

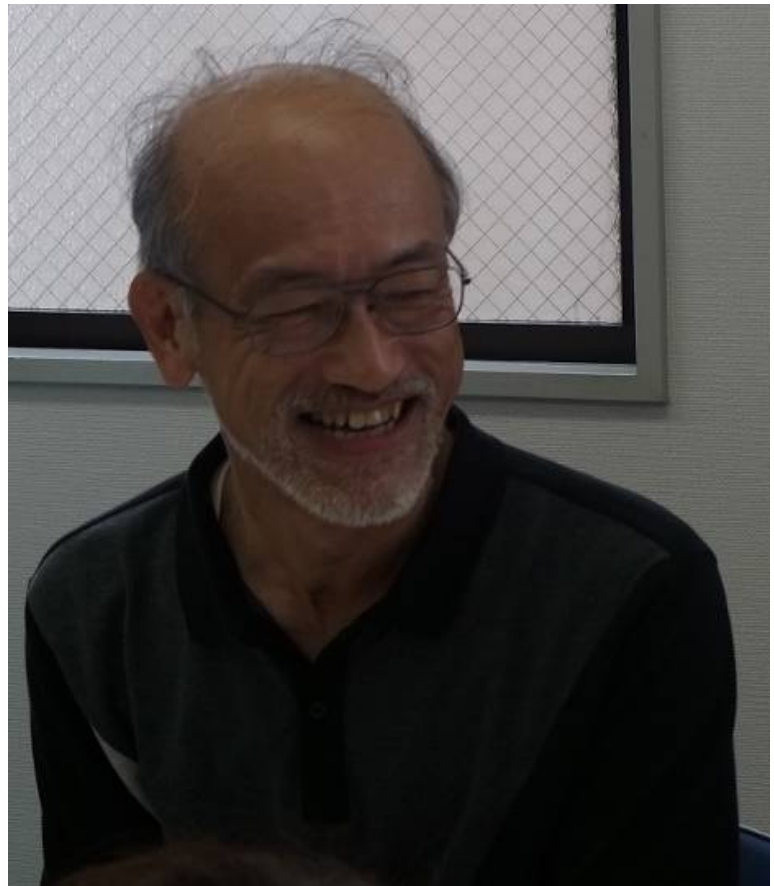


I-OWA マンスリー・セミナー 講演: 宗教、道徳と経済行動

講演: 山口 勝業

海外の人と話をする機会が多いのですが、何年か前から、日本の本当の姿が正しく伝わっていないと感じるようになりました。日本人自らがもっと発信すべきではないか。そんな問題意識を持ちながら、まず日本人の経済行動の原点は江戸時代にあるという仮説を立ててみました。時代劇や落語を見聞きすると、親近感を覚えます。これが平安時代だと、ちょっと違うと感じるでしょう。そこで、江戸時代を穿り返すと、日本人本来の経済行動の特徴が見えてくるのではないかと考えたのです。

そもそも、何故、日本は、資本主義である程度、成功したのでしょうか。マックス・ウェーバーの「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」という有名な論文がありますが、そこでは、「資本主義が発達したのは主にイギリスを中心とした西ヨーロッパで、それはキリスト教のプロテスタンティズムがあったせいだ」ということが説かれています。一生懸命働いて行けば天に召される、だから一生懸命働きなさい。プロテスタンティズムの倫理というのは簡単に言えばそういうことです。一生懸命働き、倹約をすれば結果としてお金が貯まる。そのお金を人に施すことで天国に富を積むことができる。だから西欧にしか資本主義が発達しなかったというのですが、それでは日本の場合を説明できません。





長期投資仲間通信「インベストラ이프」

宗教と道德という関係で見ると、プロテスタンティズムという来世志向の宗教心があつて、自分が頑張れば自分にいいことがあるという利己主義の道德があるわけです。日本の場合はどうかと考えると、商売繁盛、家内安全といったご利益を願う現世主義が強い一方、かなり利他主義の部分があるように思います。

例えば、江戸時代に近江商人という人々がいましたが、近江という所は浄土真宗が盛んで、それをもとに商売道德が発達しています。他人にも、商売を通じていい製品を提供する、それによって他人が喜ぶ、それでお金を払ってもらう、だから自分も儲かる。これが近江商人のいう自利・利他円満の功德です。また、遡って江戸初期には鈴木正三(しょうさん)という人物がいて、「世法即ち仏法なり」、つまり世俗の職業に励むことが修行なのだと説いています。これは「プロテスタンティズムの精神」とそっくりです。

そのほか石田梅岩の「石門心学」や、富士信仰、株仲間ごとに定められていた神社と見ていくと、江戸期の日本の職業道德も、宗教をベースにしていたことが分かります。ただ宗教そのものではなく、色々な要素が混じって出来ているのです。

欧米では、キリスト教があつて、それに基づく道德があつて、それによって教育されて、人々の行動が出てくるという単純な構造なのですが、日本は複雑で、宗教も、土着宗教や仏教から民間信仰などが混じりあつて、なんとなく「ぼやっ」と宗教みたいなものがあるのです。道德の方は、江戸幕府が朱子学を輸入して官学と定めた時に宗教色を抜いてしまい、それが道德教育に用いられるようになりました。しかし実際には、宗教に基づいた道德は、江戸時代にはしっかり根付いていたというわけです。

講演では、日本人の宗教観や、富士信仰について、また石門心学の普及活動や、寺子屋による庶民の教育について、さらに文字の統一や印刷技術と経済成長の関係にも話が及びました。

対談: アジア的な感性を投資に生かす

山口 勝業、岡本 和久

岡本| 今から 10 数年前にインドの占星学者にあなたの天職は「貿易」だと言われたことがあります。私はその当時、年金運用を行う会社の社長でした。「貿易」とは関係ない、その時は、



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

「占星学は当てにならないな」とちょっと思ったものです。でも、よく考えてみると海外の優れた運用技術を日本に導入するという意味では「輸入なのかな」と思っていました。最近、私自身も「和風資産運用」の話をいろいろなところでしていますが、アジア的な感性を生かした資産運用という考え方はこれから輸出していくべきものではないかなと感じています。欧米的な資本主義、あるいは資産運用と言うものの、コンセプトが行き着くところまで行き着いてしまって、行き場を失ってしまっている傾向がある中で、和風だけとは言いませんが、アジア的な感性をどう生かしていくということが、資産運用の世界にとっても非常に重要なポイントではないかと思っています。二宮尊徳先生や石田梅岩先生が、世界の資産運用の教科書に載ってくるようになれば非常に面白いと思いますね。先ほどの山口さんのお話にありましたが、日本の現世志向に自利・利他主義がある。利他といっても、必ずしも、他人だけの為に行っているわけではなく、結果的には自分のためになるという考え方が根底にあります。また、現世志向が強いといっても、実はそこに「のれん」や「家」というコンセプトが入ってくると「永代」という発想がでてきて、むしろ来世思考という話が出てくる。日本的なものは、すごく広がりがあるのではないかなと思いますが、その辺りはいかがでしょうか？

山口| 今日の話は、便宜的に現世志向と来世志向と分けたわけです。三井家に「町人考見録」という家訓があります。これは三代目三井高房が、子孫のために書き遺したもので、当時、京都の三井家周辺で商家や両替商をやっていた人達が破産していく状況をケーススタディーとして書き記しています。これをよく読むと、今でも通じる内容ですね。自分の代だけで金儲けをするのではなくて、三井家が子孫



代々まで続くようにする。子供に財産を譲る時も、自分の家を存続する為に、「この財産はお前だけのものではない。これは三井家全てのものだから、自分だけでは使ってはいけないよ」と伝えます。そして跡継ぎは、血縁関係のある自分の直属の子供でなくていいわけですね。自分の家のブランドを守る為に、実の息子がバカ息子だったら首にして、二代目は頭のいい子を養子に迎えマネジメントさせる。だから、三井家を始めとして日本の江戸時代から続いているところは、養子が多いのです。出来のいい人を雇い入れて番頭まで育てあげて養子にして次の代を任せる。

岡本| 「のれん」という考え方ですね。今で言うとサステナビリティを非常に重視していた。そういう意味では、現世も来世も自利も利他も全部融合しているところが日本的なマネジメントだ



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

と感じます。

山口| 外人ファンドマネージャーが日本の企業に対して、「なんで儲からないのだろう。日本の企業は ROE が低すぎて、グローバルスタンダードに達していない」と言います。でも、江戸時代の文章を読むと、「そんなに儲けなくてもいいから長く続けなさい。」と書いてあります。つまり今で言うと「ROE は低くてもいいから、キャッシュフローのデュレーションが長い方がいい」というわけですね。この間、ある外人が来た時に「ROE が 15%とえらく儲かっていると言っているけど、この会社は10年続くの？日本のこの会社はROEが5%かもしれないけど300年続くよ。どちらがいい？どちらの時価総額が高いと思う？」と、問いました。続く方がいいですよ。

岡本| 結局、その辺の価値評価をどう株価に反映させていくのか。日本の投資家が自分達の価値判断で株価評価をしていくべきですよ。ただ、経営を何も変えないでやっていけばいいというの、また、間違いの部分もあります。構造変化に即応しないで同じことをやっていたのでは潰れていくかもしれない。会社をいかに上手く変化させながら、そこそこの収益を上げ続けるというのが、日本的な経営のエッセンスだという気がします。もうちょっと日本の投資家が日本人の価値観での価値評価を、株価に反映させるようになってもいい気がしますね。ただ、外人が買うから一緒に買うとか、外人が売るから下がるとか、円高だから下がって、円安になると上がるというのは淋しい気がしますね。

山口| 市場システムが上手くいく為には、すごくたくさんの条件が揃わなければ上手くいきません。最近のグローバル化の話の中で市場原理主義が全ていいと言われますが、モノの値段がちゃんとついている市場はすごく稀で、ごく一部のものしかありません。絵画なんか特にそうで、値段があってないようなものですよ。世の中のものは市場があるように見えても実際にはないのです。市場が機能するものは、標準化されたごく一部で、たくさんの参加者がいて、毎日取引があるという類のものしかないですね。市場が機能するようなものは、コンセプトとしてはあるけれど、本当に上手くいくのはごく一部です。徳川吉宗の時代に、物価が上昇しているのに、米の値段は下落するという事態がおきました。当時は、米を売って物を買うので、米の値段は低いのに物価が上がっては困ってしまいます。そこで、商品の流通価格を統制をさせる為の組合を作らせました。これが「株仲間」です。市場経済ではなく、業種ごとに組織だって独占的に市場外の組織を作り、ここで価格をコントロールしようとしたわけです。つまり談合ですね。ただ、そういう特権を持っていると価格を自由に設定できるので、また値段が上がり始めてくると、今度は後の将軍が「株仲間が値段を吊り上げているに違いない」と、株仲間禁止令を出しました。しかし、完全に自由競争の市場になると、クオリティーが落ち、欠陥商品がでてくる為、統制がとれなくなってしまいます。市場があれば、正しい値段で、いい商品が供給できるわけではないのです。もしかすると株仲間の方が上手くいったのかもしれない。



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

岡本| 堂島の米相場は、相当、効率性が高かったですよね。

山口| 当時のデータを検証すると、コンピューターがなかった中で、先物と現物の値段がきれいについていたわけですよ。これはすごい。外人に「デリバティブの市場は世界で日本が最初だぞ。俺はそのデータを持っているんだ」と自慢しています(笑)。

岡本| インターネットも電話もない時代に、価格情報があつという間に日本全体に広がったわけですよ。効率性の高い市場が存在することは非常に重要であることは言うまでもありません。しかし、また、最近は株価の動きにみんなが一喜一憂しすぎている感じもします。その点で、ミュージックセキュリティーズの出資やエンジェル投資は面白いと思いますね。株価がないから持っているだけで嬉しい投資家しか買わない。市場に上場していませんから、株価が暴落しても関係ありません。一般的にエンジェル企業に投資する人は、その人が現役時代にやっていたことに関係した若い企業に、退職金の一部を投資して、1か月とか2か月に一回程度、その企業を訪問してアドバイスを与えるケースなどが多いと聞きます。投資家としては、これが楽しくて、それもリターンの一部ともなるわけです。ミュージックセキュリティーズの被災地ファンドというのは、寄付と出資を合体して出しているの、これもおもしろいスキームですよ。最近思うのは「貯蓄から投資へ」というよりは、「寄付から投資へ」という方が本質に近いのかなと感じます。でも、みんな流通市場に余りにも囚われすぎてしまい、一喜一憂していますが、基本的にはいかにお金を用立てるかということですからね。いろいろな意味で資本主義、マーケット、市場主義的なものに対する見直しが、日本だけじゃなく、世界的に大きな課題となってきたと思います。アジア的な感性も含めた新しい概念が、世界に知られていくといいなと思います。今日はありがとうございました。

<モデルポートフォリオ:2013年7月末の運用状況>

単位：%

		トータルリターン				リスク	1万円ずつ積み立てた場合の投資額に対する騰落率			
		1か月	1年	5年 (年率)	10年 (年率)	10年 (年率)	1年 12万円	5年 60万円	10年 120万円	2000年1月~ 163万円
4資産型	積極型	1.88	47.56	1.89	4.87	16.16	23.41	41.62	30.90	36.40
	成長型	1.30	34.51	2.11	4.25	11.41	16.67	31.06	26.84	34.21
	安定型	0.71	22.46	2.03	3.41	7.24	10.33	20.77	21.84	30.47
2資産型	積極型	3.10	45.71	2.52	5.81	18.44	21.27	45.10	39.01	47.83
	成長型	2.07	35.88	2.37	4.98	13.55	16.43	34.46	32.84	43.49
	安定型	1.03	26.61	1.86	3.89	9.32	11.79	24.12	25.54	37.18

* 投資にかかるコストは控除していない。積み立ては、税引き前分配金再投資。ポートフォリオは毎月リバランスをしたものとする。
 積み立ては計算月数分を運用したものとする。例えば1年の場合は2012年7月末に1万円投資資金を積み立て始め、2013年6月末の投資資金までとする(2013年7月末積み立て分は運用期間がないため含めていない)。
 出所: イボットソン・アソシエイツ・ジャパンがMorningstar Directにより作成。MorningstarDirectについてのお問い合わせは「投信まとなび」のお問い合わせメール(<https://www.matonavi.jp/inquiry>)にてイボットソン・アソシエイツ・ジャパンまで。

ポートフォリオの資産配分比率(外貨建て資産は円換算ベース)

4資産型		国内株式: TOPIX	外国株式: MSCI KOKUSAI	国内債券: NOMURA- BPI (総合)	外国債券: Citi WGBI (除く日本)	
		積極型	40%	40%	10%	10%
成長型	25%	25%	25%	25%		
安定型	10%	10%	40%	40%		
2資産型		世界株式: MSCI ACWI (含む日本)		世界債券: Citi WGBI (含む日本)		
		積極型	80%	20%		
		成長型	50%	50%		
		安定型	20%	80%		

ポートフォリオは「インベストラ이프」が参考のために考案した資産配分に基づき、イボットソン・アソシエイツ・ジャパンがデータを算出しています。
特定の資産配分による投資の推奨を行うものではありません。

「長期投資仲間」通信『インベストラ이프』のその他の記事はこちらからご覧ください。
<http://www.investlife.jp/>

4資産

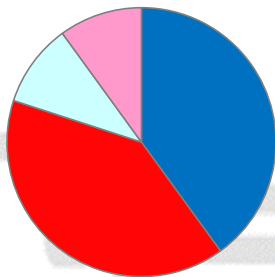
■国内株式:
TOPIX

■外国株式:
MSCI KOKUSAI

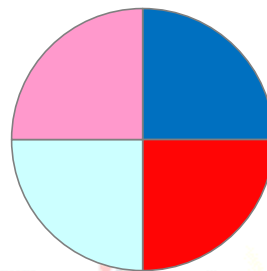
■国内債券:
NOMURA-BPI
(総合)

■外国債券:
Citi WGBI
(除く日本)

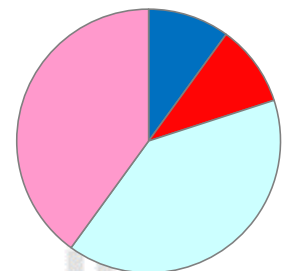
積極型



成長型



安定型

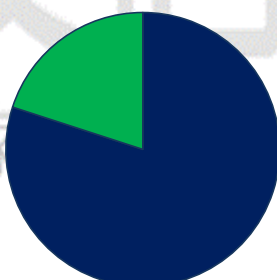


2資産型

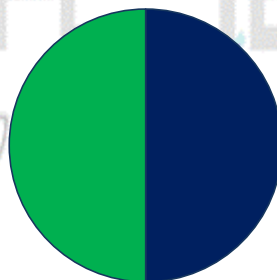
■世界株式:
MSCI ACWI
(含む日本)

■世界債券:
Citi WGBI
(含む日本)

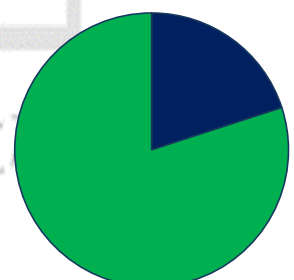
積極型



成長型



安定型



<国内で購入可能な代表的ETF:2013年7月末の運用状況>

当資料は「インベストライフ」のために、イボットソン・アソシエイツ・ジャパンがデータを算出、作成しています。特定の投資信託による投資の推奨を行うものではありません。※ファンド名をクリックするとそのファンドの詳細を見ることができます。

* 投信ブログ「梅屋敷商店街のランダムウォーカー(インデックス投資実践記)」の管理人、水瀬ケンイチさんのご協力で銘柄を選定しました。
 なお、国内株式、債券、コモディティについては「インベストライフ」が選定しました。

「長期投資仲間」通信「インベストライフ」のその他の記事はこちらをご覧ください。http://www.investlife.jp/

Ticker	ファンド名	トータルリターン (米ドル換算)					トータルリターン (円換算)					リスク (円換算)		1万円ずつ積み立てた場合の 投資額に対する騰落率				1万円ずつ積み立てた場合の 月末資産額				純資産 2013年7月末		総経費率 (%・5年平均)	イボットソン 分類	連動を目指す投資対象指数
		1ヵ月	1年	5年 (年率)	7年 (年率)	10年 (年率)	1ヵ月	1年	5年 (年率)	7年 (年率)	10年 (年率)	10年 (年率)	10年 (年率)	1年 12万円	5年 60万円	7年 84万円	10年 120万円	1年 12万円	5年 60万円	7年 84万円	10年 120万円	百万ドル	億円			
1308	上場インデックスファンドTOPIX (日興AM)	0.81	24.66	1.06	-0.69	5.68	-0.19	56.99	-0.83	-2.82	3.55	19.79	16.47	29.06	37.78	21.78	17.70	15.49	82.67	102.29	141.24	5,871	5,774	0.08	国内株式・ 大型ブレンド型	TOPIX(配当込み)
1348	MAXIS トピックス上場投信 (三菱UFJ投信)	0.81	24.66	-	-	-	-0.19	56.99	-	-	-	-	-	29.05	-	-	-	15.49	-	-	1,031	1,014	0.05	国内株式・ 大型ブレンド型	TOPIX(配当込み)	
1554	上場インデックスファンド世界株式 (MSCI ACWI)除く日本(日興AM)	5.44	18.18	-	-	-	4.40	48.83	-	-	-	-	-	22.70	-	-	-	14.72	-	-	16	16	0.20	外国株式・ 世界型(除く日本)	MSCI ACWI ex Japan指数(円換算)	
VT	Vanguard・トータル・ワールド・ストックETF	5.01	22.06	4.47	-	-	3.97	53.72	2.52	-	-	-	-	24.94	51.59	-	-	14.99	90.96	-	2,459	2,418	0.19	外国株式・世界型	FTSE グローバル・オールキャップ指数	
IOO	iShares® グローバル 100 ETF	4.75	22.14	3.61	3.60	6.20	3.72	53.81	1.67	1.38	4.07	20.62	15.72	25.80	48.08	33.44	33.38	15.10	88.85	112.09	160.06	1,316	1,295	0.40	外国株式・世界型	S&P グローバル 100 指数
TOK	iShares® MSCI コクサイ ETF	5.73	23.26	4.95	-	-	4.68	55.23	2.98	-	-	-	-	26.46	56.87	-	-	15.18	94.12	-	562	553	0.25	外国株式・世界型	MSCI KOKUSAI(コクサイ)指数	
EFA	iShares® MSCI EAFE ETF	5.25	23.39	1.01	1.90	7.83	4.21	55.39	-0.88	-0.28	5.66	23.00	18.16	24.37	41.56	25.24	28.51	14.92	84.94	105.20	154.22	42,059	41,367	0.34	外国株式・ 大型ブレンド型	MSCI EAFE 指数
VSS	Vanguard・FTSE・オールワールド (除く米国) スモールキャップETF	5.40	20.47	-	-	-	4.36	51.71	-	-	-	-	-	20.83	-	-	-	14.50	-	-	1,438	1,414	0.25	外国株式・ 中・小型ブレンド型	FTSEグローバル・スモールキャップ (除く米国)指数	
VTI	Vanguard・トータル・ストック・マーケットETF	5.48	26.81	8.79	6.89	8.39	4.44	59.70	6.76	4.60	6.20	21.02	15.23	30.90	73.25	58.71	59.89	15.71	103.95	133.31	191.87	33,455	32,905	0.05	米国株式・ 大型ブレンド型	MSCI USブロードマーケット指数
VB	Vanguard・スモールキャップETF	6.69	35.21	11.21	8.77	-	5.63	70.28	9.13	6.44	-	-	-	35.69	85.77	72.63	-	16.28	111.46	145.01	-	7,130	7,013	0.10	米国株式・ 小型ブレンド型	CRSP USスモールキャップ指数
EEM	iShares® MSCI エマージング・マーケット ETF	1.08	1.33	-0.01	4.97	12.61	0.09	27.61	-1.88	2.73	10.34	30.20	23.80	7.48	22.05	13.26	36.07	12.90	73.23	95.14	163.28	35,631	35,045	0.69	外国株式・ 新興国型(複数国)	MSCI エマージング・マーケット指数
VWO	Vanguard・FTSE・ エマージング・マーケットETF	0.98	1.87	0.36	5.40	-	-0.02	28.29	-1.52	3.15	-	-	-	7.28	24.34	15.27	-	12.87	74.61	96.83	-	50,030	49,207	0.18	外国株式・ 新興国型(複数国)	FTSEエマージング指数
FM	iShares® MSCI フロンティア 100 ETF	4.82	-	-	-	-	3.78	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	219	216	0.79	外国株式・ その他地域	MSCI フロンティア・マーケット 100 指数	
IGOV	iShares® 世界国債(除く米国)ETF	2.17	1.81	-	-	-	1.16	28.21	-	-	-	-	-	11.08	-	-	-	13.33	-	-	406	399	0.35	外国債券・世界型	S&Pシティグループ・ インターナショナル・ トレジャリー・ボンド指数(除く米国)	
AGG	iShares®・コア 米国総合債券市場 ETF	0.13	-2.07	5.03	5.22	-	-0.86	23.33	3.07	2.97	-	-	-	10.20	23.06	20.89	-	13.22	73.83	101.55	-	14,711	14,469	0.08	米国債券・ 中長期型	パークレイズ米国総合指数
TIP	iShares®・米国物価連動国債 ETF	0.71	-5.98	4.51	5.53	-	-0.29	18.40	2.56	3.27	-	-	-	6.16	24.43	22.49	-	12.74	74.66	102.89	-	15,383	15,130	0.20	米国債券・ インフレヘッジ型	パークレイズ米国TIPS指数 (シリーズL)
RWX	SPDR ダウ ジョーンズ インターナショナル リアル エステートETF	1.25	12.49	2.96	-	-	0.25	41.67	1.04	-	-	-	-	15.23	53.35	-	-	13.83	92.01	-	3,746	3,684	0.59	海外不動産 (除く米国) セクター型	ダウ・ジョーンズ・ グローバル(除く米国) セレクト・ リアル・エステート・セキュリティーズ指数	
IYR	iShares®・米国不動産 ETF	0.23	5.64	6.02	2.96	8.78	-0.76	33.04	4.04	0.75	6.59	29.81	25.10	15.17	65.65	47.13	48.60	13.82	99.39	123.59	178.32	4,279	4,208	0.47	米国不動産 セクター型	ダウ・ジョーンズ米国不動産指数
GSG	iShares® S&P GSCI コモディティ・ インデックス・トラスト	4.75	-0.28	-12.92	-6.07	-	3.72	25.59	-14.55	-8.08	-	-	-	11.37	13.78	-1.93	-	13.36	68.27	82.38	-	1,136	1,118	0.75	コモディティ・総合	S&P GSCI商品指数
GLD	SPDR®ゴールド・シェア	10.24	-19.29	7.02	10.58	-	9.15	1.65	5.02	8.21	-	-	-	-6.77	15.87	26.43	-	11.19	69.52	106.20	-	39,176	38,531	0.40	コモディティ・貴金属	金地金価格 (ロンドン午後決め値)

*積み立ては税引き前分岐金再投資、計算月数分を運用したものとします。例えば1年の場合は2012年7月末に1万円で積み立てを開始し、2013年6月末投資までの2013年7月末における運用成果とする(2013年7月の積み立て額は入れない)。

出所: MorningstarDirect のデータを用いてイボットソン・アソシエイツ・ジャパンが作成。MorningstarDirectについてのお問い合わせは「投信まとなび」のお問い合わせメール(<https://www.matonavi.jp/inquiry>)にてお気軽にご返信ください。

Copyright ©2013 Ibbotson Associates Japan, Inc.